

大阪府埋蔵文化財調査報告 2009-9

衣ヶ谷古墳

—一般府道春木岸和田線道路改良事業に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会



衣ヶ谷古墳

—一般府道春木岸和田線道路改良事業に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会

卷頭図版1 衣ヶ谷古墳



東から



須惠器・土師器

序 文

平成 20 年 5 月、岸和田土木事務所より道路工事現場内で古墳の石室のようなものを発見したとの連絡がありました。急遽、文化財保護課の職員が現地を確認したところ、まさしく横穴式石室の天井石が露出しており、新規発見の古墳であることが明らかになりました。そこで、一旦、工事を中断し、発掘調査にとりかかることになりました。古墳は、岸和田市教育委員会と相談して「衣ヶ谷古墳（ころもがたにこふん）」と命名されました。

発掘調査の結果、古墳は横穴式石室を主体部とした一辺約 10 m の比較的小さな方墳で、7 世紀初頭に造られたものであることがわかりました。

さらに、石室内からは副葬品として須恵器や土師器が多数出土し、木棺に使われた釘や被葬者が身につけていたと思われる金銅製の耳飾も発見されました。

また、この時期の古墳が少ない泉州地域では大変貴重な資料であることから、石室の一部を「大阪府営蜻蛉池公園内」に移築、復元して公開することになりました。府民の皆様には、地域の歴史を物語る文化財として 1400 年前の古墳の姿を実感していただき、親しみをもっていただけたら幸いと考えます。

大阪府都市整備部岸和田土木事務所をはじめとする関係者の皆様には、古墳の発見に際しご一報いただきましたこと、発掘調査の実施および古墳の移築、復元にあたって、多大なご協力、ご支援を賜りましたことを深く感謝いたします。

今後とも大阪府の文化財行政に変わらぬご理解とご協力を賜りますよう、お願いいたします。

平成 22 年 3 月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長 野口雅昭

例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会文化財保護課が大阪府都市整備部の依頼を受けて実施した岸和田市三ヶ山町所在衣ヶ谷古墳の発掘調査報告書である。
2. 現地調査は、文化財保護課調査第二グループ主査橋本高明が担当し、平成 20 年 9 月 1 日から平成 20 年 11 月 5 日まで実施した。
遺物整理は、調査管理グループ主査宮野淳一、同三宅正浩、副主査藤田道子を担当とし、平成 21 年度に実施した。
3. 本調査の調査番号は、08013 である。
4. 平面図の作成にあたっては、写真測量を株式会社エムズに委託した。
4. 出土遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
5. 調査で作成した記録資料と出土遺物は、大阪府教育委員会で保管している。
6. 本書の執筆、編集は橋本が担当した。
7. 発掘調査、遺物整理及び本書の作成に要した経費は、大阪府都市整備部が負担した。
8. 本書は、300 部作成し、一部あたりの印刷単価は、1,340 円である。

目 次

序文

例言

目次

I.	調査に至る経過	1
1.	調査の経緯	1
2.	調査の方法	2
II.	環境	2
III.	調査成果	7
1.	基本層序と微地形	7
2.	古墳	8
墳丘		8
石室		18
排水溝		29
3.	出土遺物	29
IV.	まとめ	35
	報告書抄録	36

挿図目次

第1図 位置図 (1/25,000)	1
第2図 衣ヶ谷古墳周辺古墳分布図 (1/6,000)	5 ~ 6
第3図 調査地全体図 (1/100)	9 ~ 10
第4図 調査地南壁土層断面図 (1/50)	11 ~ 12
第5図 墳丘土層断面図 (1/40)	13 ~ 14
第6図 墳丘裾部土層断面図 (1/40)	15
第7図 石室平面図 (1/50)	16
第8図 石室展開図 (1/50)	18
第9図 石室平面図 (天井石 1/20)	19 ~ 20
第10図 石室A面立面図 (1/20)	21 ~ 22
第11図 石室B面立面図 (1/20)	23 ~ 24
第12図 石室C面立面図 (1/20)	25
第13図 石室入口付近立面図 (1/20)	26
第14図 石室床平面図 (1/20)	27 ~ 28
第15図 排水溝平面図 (1/50)	30
第16図 排水溝詳細図 (1/20)	31 ~ 32
第17図 出土遺物1 (1/4)	33
第18図 出土遺物2 (1/1)	34

図版目次

巻頭図版 1 衣ヶ谷古墳

巻頭図版 2 出土遺物

- 図版1 調査地遠景（上段：西から、下段：東から）
図版2 調査区全景（垂直）
図版3 古墳全景（上段：南西から、下段：東から）
図版4 トレンチ南壁断面（上段：北から、下段：北西から）
図版5 トレンチ南北セクション西壁（上段：西から、下段：北西から）
図版6 トレンチ南北セクション東壁（上段：北半部東から、下段：南半部東から）
図版7 墳丘背面（上段：北から、下段：南から）
図版8 石室1（上段：東から、下段：西から）

- 図版 9 石室 2（上段：北西から、下段：北東から）
- 図版 10 石室 3（上段：東から、下段：東から）
- 図版 11 石室 4（入口付近から奥壁を見る）
- 図版 12 石室 5（玄室から入口を見る）
- 図版 13 石室 6（上段：玄室から入口を見る、下段：羨道床）
- 図版 14 石室 7（羨道 上段：側壁A面、側壁B面）
- 図版 15 石室 8（玄室 上段：奥壁、下段：玄室床）
- 図版 16 石室 9（玄室側壁 上段：玄室側壁A面、下段：玄室側壁B面）
- 図版 17 石室 10（羨道下部 上段：東から、下段：入口付近から奥壁を見る）
- 図版 18 石室 11（羨道下部 上段：南東から、下段：東から）
- 図版 19 石室 12（第一石 上段：南西から、下段：南から）
- 図版 20 石室 13（第一石 上段：西から、下段：南東から）
- 図版 21 石室 14（玄室第一石 上段：南から、下段：北西から）
- 図版 22 石室床 1（玄室 東から）
- 図版 23 石室床 2（上段：東から、下段：北東から）
- 図版 24 遺物出土状況1（須恵器・土師器 上段：玄室、下段：羨道）
- 図版 25 遺物出土状況2（釘・金環 上段：玄室、下段：玄室）
- 図版 26 排水溝1（上部 上段：西から、下段：北東から）
- 図版 27 排水溝2（下部 上段：西から、下段：東から）
- 図版 28 排水溝3（下部 上段：北西から、下段：北から）
- 図版 29 石室掘方（上段：西から、下段：東から）
- 図版 30 石室移築状況（上段：玄室部、下段：大阪府営姫路池公園内）
- 図版 31 出土遺物1（須恵器）
- 図版 32 出土遺物2（須恵器）
- 図版 33 出土遺物3（土師器・鉄釘・金環）

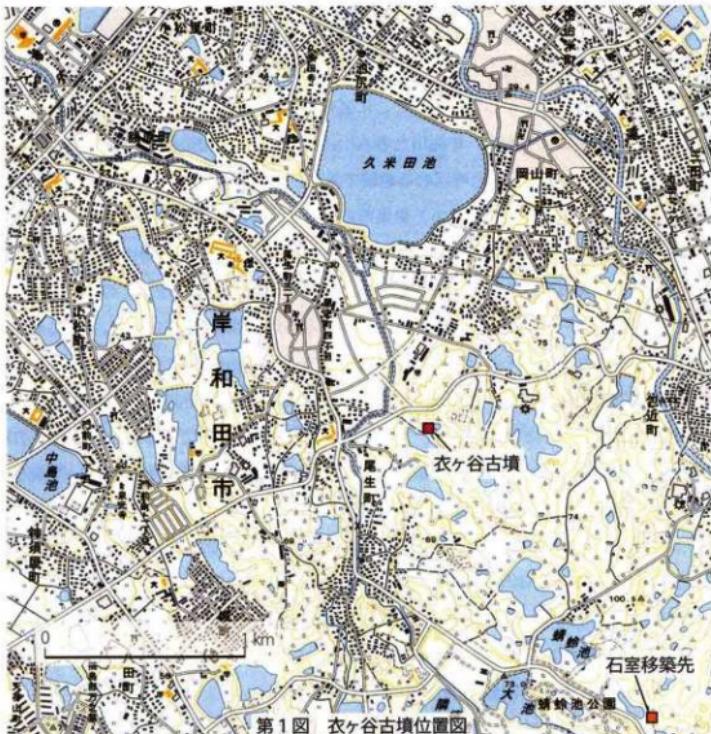
I. 調査に至る経過

1. 調査の経緯（第1図）

平成20年5月、岸和田市三ヶ山町地内的一般府道春木岸和田線予定地内において道路工事現場で丘陵の土砂を掘削中に「大きな石が出てきて石室のようになっている。」との連絡が大阪府教育委員会文化財保護課入った。急遽、現地を確認したところ横穴式石室の天井石が露出していた。横穴式石室およびその周囲を精査したところ、古墳は道路建設予定地内のほぼ中央に位置することがわかった。

古墳の取り扱いについて、大阪府都市整備部岸和田土木事務所と協議の結果、一旦道路工事を中断し、発掘調査を実施することとなった。現地発掘調査は、約250m²を対象とし、約2カ月間実施した。

古墳の名称については岸和田市教育委員会と協議し、新規発見の古墳として「衣ヶ谷古墳（ころもがたにこふん）」と命名した。



第1図 衣ヶ谷古墳位置図

2. 調査の方法

古墳は概ね南北方向の丘陵の東側斜面で、丘陵頂部よりやや下った位置に築かれていた。墳丘盛土の大半は、工事中に掘削されて、すでに横穴式石室の天井石が露出していたために石室の調査に主眼をおくことにした。横穴式石室の調査は、天井石の平面図、側壁、奥壁、入口付近の立面図、床面の平面図、排水溝の平面図、断面図、石室掘方の平面図および各々写真撮影を行い記録の作成に努めた。

なお、横穴式石室の一部（玄室部分）を古墳から約1.8km南東の府営蜻蛉池公園内に移築、復元して公開している。

II. 環境

衣ヶ谷古墳の周辺（岸和田市北部）の地理的環境と古墳の分布について外観を紹介することにする。各古墳の内容については、『岸和田市史』第1巻に詳しく掲載されているので参考にしながら、近年の調査成果を加えつつ述べることにする。

衣ヶ谷古墳の位置する岸和田市北部の地形は、基本的には和泉山脈から派生する丘陵が大阪湾に向かって概ね南北方向に細長く伸びている。その丘陵の合間の谷筋に牛滝川、春木川が主要な河川として流れている。したがって、今回ここに述べる衣ヶ谷古墳の周辺地域としては、牛滝川の東側の東山丘陵と呼ばれる地域、牛滝川と春木川に挟まれた久米田山台地、岡山丘陵と呼ばれる地域、春木川の東側の尾生丘陵と呼ばれる地域である。

まず、牛滝川右岸の丘陵は、岸和田市と和泉市の行政界に位置し、東山丘陵と呼ばれ丘陵の西側斜面が岸和田市域である。東山丘陵の先端の標高約60mに立地する摩湯山古墳（全長約200m）は、和泉地域最大の規模を持つ前期古墳である。古墳の北から西にかけての、牛滝川によって形成された平野部を一望する位置にある。摩湯山古墳の後円部の南側に隣接している馬子塚古墳は、近年発掘調査が進み葺石や埴輪列が確認され、一辺23mの方墳として報告されている。東山丘陵を摩湯山古墳から南に、約400mの丘陵先端部に東山古墳がある。『岸和田市史』によれば、墳頂部に散乱していた須恵器から、7世紀代の所産と考えられている。さらに、約700m南方の標高約70mの丘陵上に、三田古墳がある。（財）大阪府埋蔵文化財協会によって発掘調査が実施され、木棺直葬と横穴式石室の複数の主体部を有する直径18mの円墳で6世紀後半代の所産である。三田古墳からさらに南へ約1kmの標高約90mの丘陵上に儀平山古墳がある。古墳の実態はよくわからないが、『岸和田市史』によれば、横穴式石室を有する可能性を指摘している。摩湯山古墳の南の標高約40mの平地部に広がる三田遺跡内からも、発掘調査によって円墳1基と方墳2基が、確認されている。中世の開発で墳丘は削られ、周溝のみ検出されたものであるが、出土した須恵器から6世紀前半代の比較的小型の古墳である。

次に、牛滝川と春木川に挟まれた地域について述べる。久米田池の北西に隣接した標高40m

前後の丘陵上で、久米田山台地とよばれる独立丘陵状の台地に久米田古墳群がある。久米田古墳群は貝吹山古墳、風吹山古墳、女郎塚古墳、無名塚古墳、持ノ木古墳、光明塚古墳、志阿弥法師塚古墳、長坂古墳、の 8 基の古墳がある。台地内の最高所である標高約 45 m に立地するのが、前期の前方後円墳である貝吹山古墳である。全長 135 m で、際立った存在である。貝吹山古墳の南西にある風吹山古墳は久米田古墳群第二位の規模を持ち、標高 45 m に立地する帆立貝式の前方後円墳で、全長 71 m であることが、発掘調査の結果で判明した。女郎塚古墳は風吹山古墳の南に位置し、標高約 42 m に立地する。発掘調査の結果、円筒埴輪列を確認し、直径約 32 m の円墳に復元している。無名塚古墳は、風吹山古墳の北東に位置する直径 26 m の円墳で、かつては周溝と埴輪列の存在が確認されている。風吹山古墳の東に位置する持ノ木古墳は、発掘調査によつて新しく発見されたもので、墳丘はほとんど削られているが、周溝を有する一辺 12 m の小型の方墳である。周溝内から初期須恵器が出土した。光明塚古墳は貝吹山古墳の東に隣接しており、久米田寺境内に位置する。直径 25 ~ 30 m の円墳と推定される。志阿弥法師塚古墳は貝吹山古墳の西 100 m に位置する直径 16 m の円墳である。長坂古墳は志阿弥法師塚古墳の南西に隣接して存在した直径 10 m 程度の円墳であったが、墳丘は残っていない。

池尻古墳は、久米田山台地の北方の標高 27 m に立地した円墳である。すでに全壊している。久米田台地から北側に一段おりた平地部に位置すること、近年池尻古墳に隣接する田鶴羽遺跡内から古墳の痕跡が、複数確認されていることを考え合わせれば、天の川左岸の段丘上に久米田古墳群とは別の古墳群を想定するべきと考えられる。

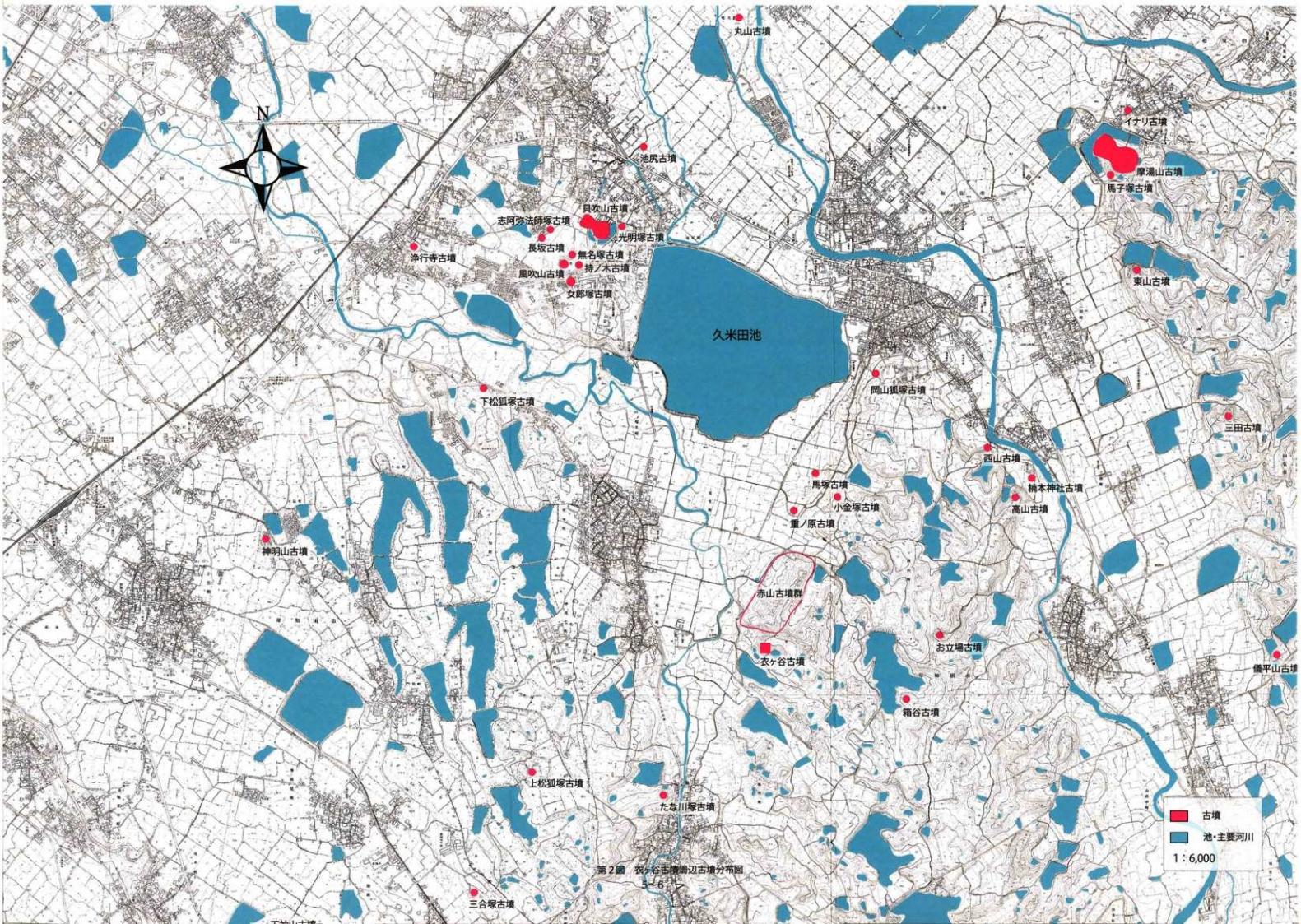
牛滝川と春木川に挟まれた地域の久米田池より南の岡山丘陵に、後期の古墳が点在する。衣ヶ谷古墳もこの地域内に属することになる。馬塚古墳、小金塚古墳、重ノ原古墳は、標高 40 m 前後の丘陵北側の平地部に立地する円墳であるが、詳細は不明である。ただし、『岸和田市史』によれば重ノ原古墳は横穴式石室を有し、須恵器が出土している。岡山狐塚古墳、西山古墳、楠本神社古墳、高山古墳は丘陵状に位置するものの、牛滝川を望む丘陵先端に立地している。標高は 45 ~ 60 m である。岡山狐塚古墳は、河原石を積んだ小竪穴式石室を主体部としていたことが『岸和田市史』に記載されているが、その他の古墳については不明である。重ノ原古墳の南の通称赤山の丘陵にある赤山古墳群は、『岸和田市史』によると 3 基の竪穴式小石室が確認できるされており、岸和田市教育委員会では赤山古墳群の実態を把握するべく確認調査を実施したが、須恵器片二片を検出したのみで、埋葬施設及び古墳を確認することはできなかった。お立場古墳、箱谷古墳は丘陵の奥深い所に立地している。お立場古墳は標高約 70 m 、箱谷古墳は標高約 65 m であり、共にかなり高所に立地するといえる。

次に、春木川の西側の尾生丘陵の古墳をみると数も極端に少なく、集中することなく点在する様子がわかる。春木川を望む位置に、尾生丘陵の先端付近の標高 26 m 前後に立地する下松狐塚古墳、標高 50 m 前後に立地するたな川古墳、ともに後期の円墳であろう。神明山古墳、三合塚古墳は、尾生丘陵の西側に位置し、丘陵の西側に広がる平野部を望む位置に立地している。

以上、衣ヶ谷古墳周辺の古墳を、丘陵と河川によって地形分類しながら概観したわけであるが、最後に時間的な流れの中で、若干考えてみることにする。東山丘陵の摩湯山古墳、久米田山台地の貝吹山古墳共に泉州地域を代表する前期後半の前方後円墳である。どちらが先行して築造されたかは意見の分かれるところであるが、さほど差の無いものと考えられる。規模については正例的に摩湯山古墳が優位を誇っている。ただし、地域別に古墳の展開を考えた場合、東山丘陵においては摩湯山古墳に統く古墳が見当たらない。久米田古墳群は貝吹山古墳から風吹山古墳への系譜、女郎塚古墳、無名塚古墳、持ノ木古墳など前期後半から中期への展開が認められる。逆にいえば中期古墳は久米田古墳群にしか認められないともいえる。次に前方後円墳について考えると地域の初期的な古墳については前方後円墳として成立しているが、中期にはつながらない。久米田古墳群において風吹山古墳が帆立貝式の前方後円墳であることが、発掘調査の結果明らかになつたが、その後は円墳と少量の方墳である。これもこの地域の特徴と言えるであろう。後期古墳については、平地部展開する三田遺跡、池尻古墳と田鶴羽遺跡、岡山丘陵北側の馬塚古墳、小金塚古墳、重ノ原古墳と丘陵状に展開する古墳に大きく分類することができる。詳細に検討すれば時期差を表しているのかもしれないが、現時点では古墳の立地の違いにとどめる。次に衣ヶ谷古墳と同時期（終末期）の古墳であるが、『岸和田市史』で紹介されている中では東山丘陵の東山古墳を7世紀代に比定している。また、重ノ原古墳出土の須恵器にも7世紀まで下る資料がある。これは古い時期の須恵器も見られるので追葬があったのかもしれない。いずれにせよ、極めて少数と言える。

参考文献

- 「大阪府史蹟名勝天然記念物」第四冊 昭和六年三月 大阪府学務部
- 「大阪府史跡名勝天然記念物調査報告」第三輯 昭和七年三月 大阪府
- 『岸和田市史』第1巻 昭和54年9月 岸和田市
- 「岸和田市文化財調査概要 18」 平成5年3月 岸和田市教育委員会
- 「岸和田市文化財調査概要 19」 平成6年3月 岸和田市教育委員会
- 「岸和田市文化財調査概要 27」 平成13年3月 岸和田市教育委員会
- 「岸和田市文化財調査概要 29」 平成15年3月 岸和田市教育委員会
- 「岸和田市文化財調査概要 33」 平成19年3月 岸和田市教育委員会
- 「岸和田市文化財調査概要 34」 平成20年3月 岸和田市教育委員会
- 「岸和田市文化財調査概要 35」 平成21年3月 岸和田市教育委員会
- 「上フジ遺跡Ⅲ・三田古墳」 1993年 (財)大阪府埋蔵文化財協会
- 「大阪府文化財地名表」 2001年3月 大阪府教育委員会



古墳
池・主要河川
1:6,000

III. 調査成果

1. 基本層序と微地形（第4図：図版4、5）

衣ヶ谷古墳は、岡山丘陵の先端、通称赤山丘陵とよばれる標高70m前後の概ね南北方向にのびる丘陵の南端付近の東側斜面に位置する。この丘陵の北方には、数基の後期古墳からなる赤山古墳群の存在が、古くから知れている。衣ヶ谷古墳は、赤山古墳群と同じ丘陵に位置するものの、丘陵の南端で、春木川にそそぐ谷筋に面しており、やや赤山古墳群の一群とは立地条件を異にすると言える。

今回の調査は、丘陵頂部よりやや下った標高56.5mから標高49.5mまでを調査区とした。衣ヶ谷古墳は、標高約53～50mの丘陵の東斜面に立地している。なお、今回の調査区および衣ヶ谷古墳、横穴式石室の主軸は、真北より西に振れている。したがって、正確には古墳の主軸や石室の主軸は、北西方向から南東方向を向いていると表現するのが正しいが、以下の記述については、便宜上、海側を西、山側を東として行う。正確な方位については、各図に示した方位を参照してほしい。

今回の調査区の基本的な層序は、第4図に示したとおり、表土層の直下に①暗黄褐色粘性砂質上層、②暗黄赤色粘質土層、③赤色砂質土層が、約1～1.6mの厚みをもって堆積している。これらの中層内には部分的ではあるが、細砂層が筋状（ラミナ）に観察することができる。したがって、①～③層は、流水によって堆積したものであると考えられる。

「岸和田市史」第1巻においても指摘しているように、一見、明るい赤色を呈していることから、通称「赤山丘陵」とよばれるようになったのであろう。基本的には、古墳より高所の、丘陵の上部堆積層であると思われる。まさに、流水によって土砂が大量に流され、衣ヶ谷古墳を覆うようにして二次堆積している。無遺物層である。

⑤暗灰色粘質土層は、古墳築造後に形成された表土層と考えられる。調査区南壁では、古墳の外側になるので墳丘の盛土層は見られないが、地山（⑦淡灰茶色粘土層）の直上に堆積する。古墳築造時に付近一帯の地形を整形した後に、表土化したものと考えられる。地山面の傾斜を見ると、調査区西端から約11m付近で、なだらかな傾斜からほぼ平坦になる。古墳の築造時に丘陵を整形してほぼフラットな面を作り出したと考えられる。また、調査区の東端約8mの付近で地山が急激に下降し、谷になる。この谷の埋土は、上層が⑦淡灰茶色粘質土層、⑧暗灰色粘土層で古墳の築造時の堆積あるいは墳丘の盛土の流れ込みと考えられる。下層は、⑨暗褐色粘質土層で古墳築造以前の谷の埋土と考えられる。元来の谷地形は、古墳の築造によって、完全に埋まったと言える。

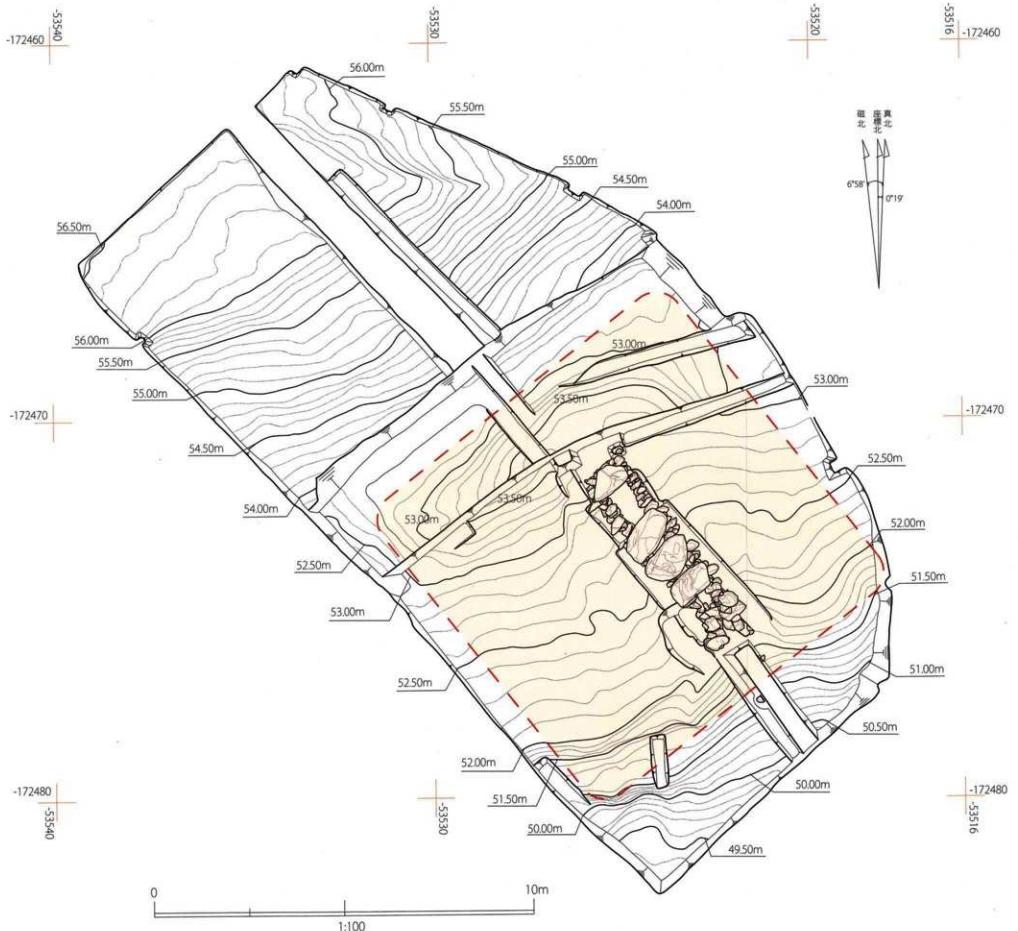
2. 古墳（第3、5～15図；図版2、3、6～29）

墳丘（第3、5、6図；図版2、3、6、7）

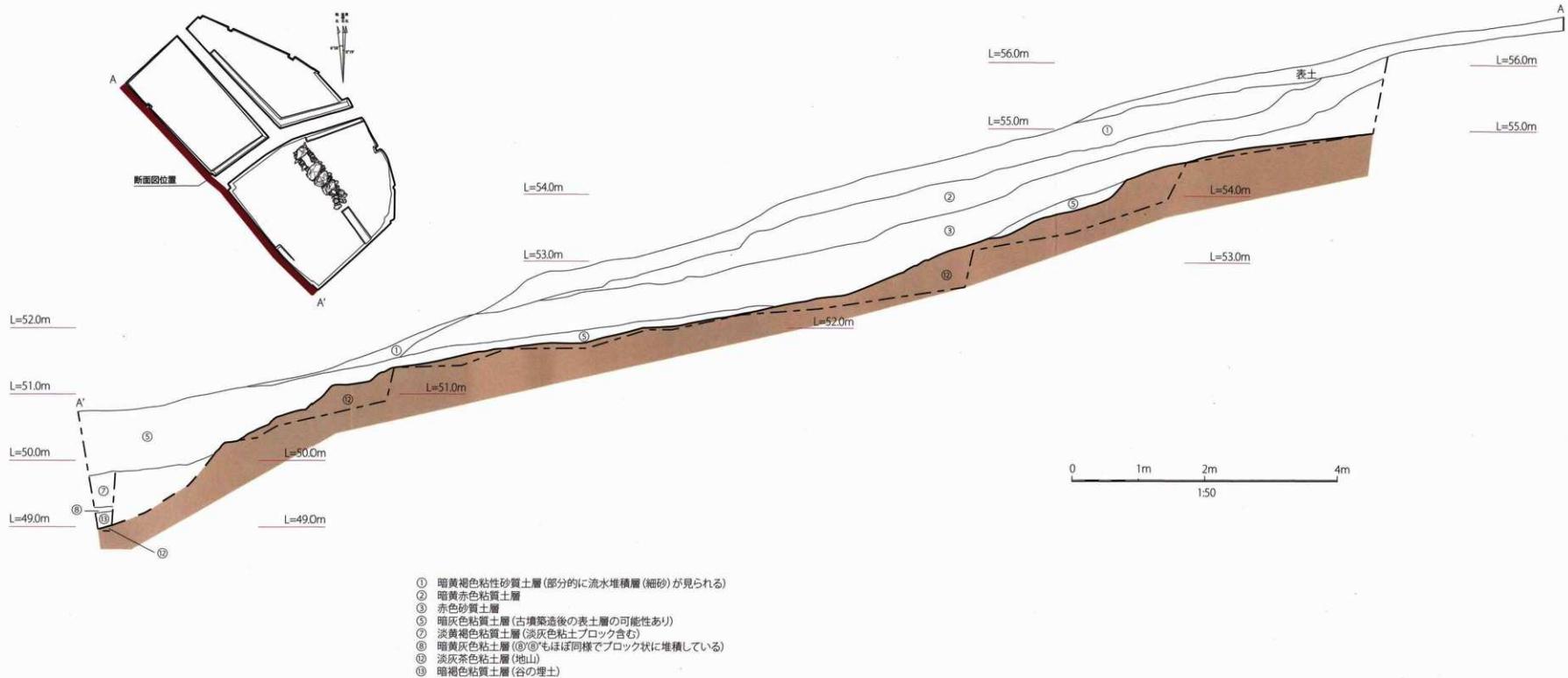
衣ヶ谷古墳は、一辺約10mの方墳である。工事中に発見されたため、墳丘の盛土はほとんど失っている。第5図に示すとおり、墳丘の西端で、若干残っていた墳丘の断面を観察すると、上層より①暗黄褐色粘性砂質土層が墳頂部で0.9m、南端で1.2mの厚みで堆積している。その直下に②暗黄赤色粘質土層が0.1～0.2mの厚みで堆積する。さらに③赤色砂質土層が0.1～0.6mの厚みで堆積している。北端には、④暗灰色粘土層が0.1～0.15mの厚みで堆積している。基本層序で述べたとおりこれらの層位には、ラミナが観察できることから、流水による堆積層である。⑤暗灰色粘質土層は、0.1～0.2mの厚みで、古墳を覆うように見られる。古墳築造後の表土層と考えられる。この墳丘より上層の土の堆積状況を見ると、⑥層の上部に③層、②層が堆積した時点では、まだ墳丘の高まりは見ることができたと思われるが、①層の堆積によって、墳丘は完全に埋没したと考えられる。

以下、墳丘の盛土について述べることにする。⑥および⑥'は黄褐色系の粘土層で墳頂付近から北側に0.1～0.2mの厚みで、淡灰色粘土層のブロックが混じる。⑦淡黄褐色粘質土層は墳丘中央付近で0.8mと最も厚くみられる。⑥と同様、淡灰色粘土のブロックが混じる。⑧、⑧'、⑧"は暗黄灰色系の粘土層で、基本的には同じ土層と考えられる。石室の掘方（墓坑）の外では地山直上に、掘方内では掘方の埋土の上層に認められる。いずれも0.1～0.2mの厚みで薄く積み重ねるように、広範囲にみられるもので、墳丘のベースをなしているものと考えられる。⑨暗橙黃灰色粘質土層、⑩暗黄橙灰粘質土層、⑪黄灰褐色粘質土層は石室の掘方の埋土で、⑨、⑩は暗灰色粘土層のブロックが混じる。先にも述べたように、墳丘の盛土の大半が失われているので、全体の様相は不明な点が多いが、第5図を見る限り、墳丘の盛土には灰色系の粘土ブロックが混じると言える。これは、古墳築造時に丘陵を造成した土を、再度墳丘の盛土、石室掘方の埋土に利用した際に、混入したためと考えられる。墳丘の西側の墳丘背面については、丘陵を造成した時に生じた崖と、墳丘との間の窪地はうかがうことができるが、周濠をめぐらしたものではない。また、墳丘の北側、南側にも周濠の痕跡は認められない。したがって、衣ヶ谷古墳には、周濠は存在しないものと考えられる。

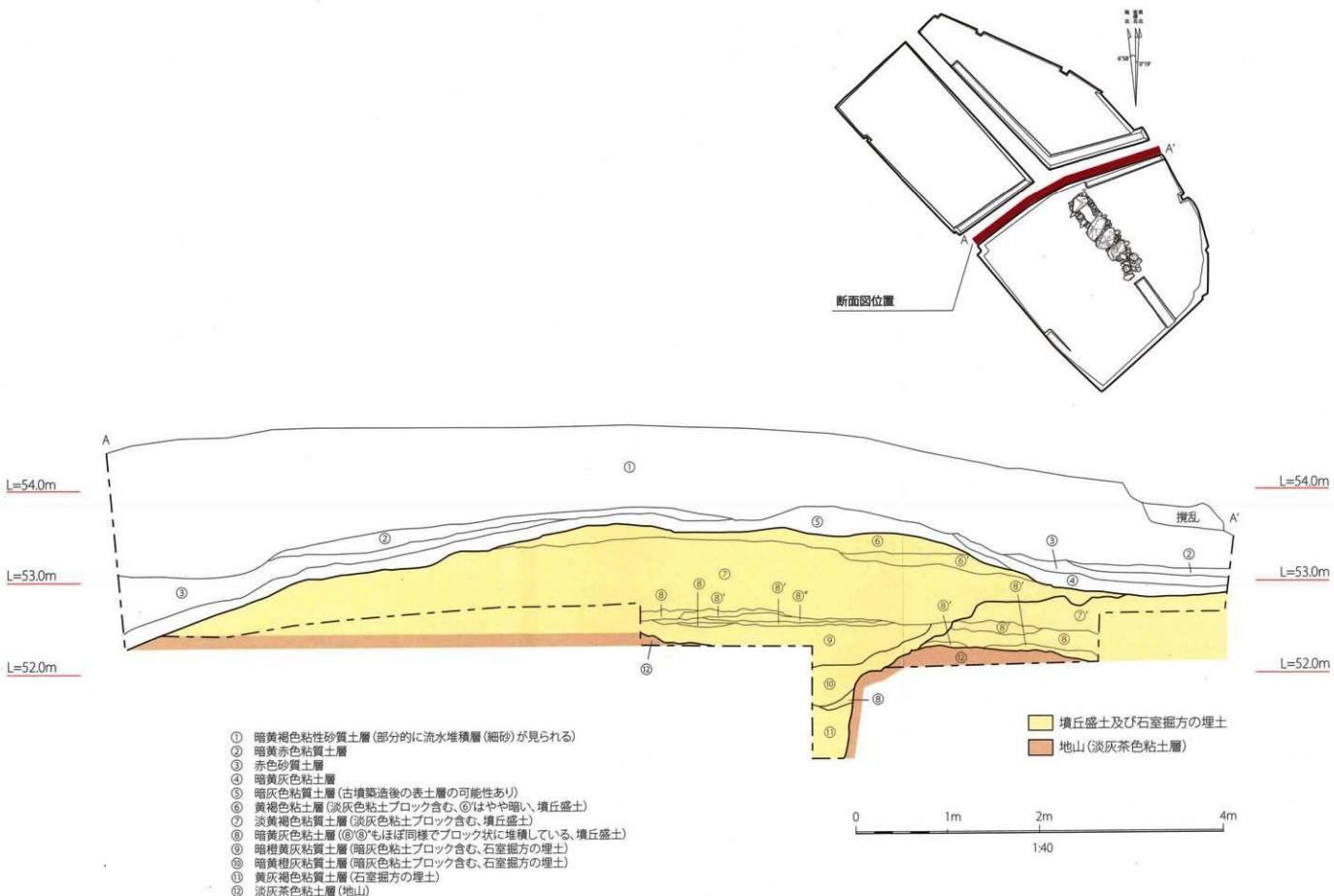
次に、墳丘の東端について述べることとする。石室の入口付近の東側に、設定したトレーンチの上層断面を観察すると、第6図に示したとおり、上層の①暗黄褐色粘性砂質土層には、南壁や墳丘土層で観察されたのと同様に、ラミナの痕跡が認められる。墳丘を覆うように、堆積していることがわかる。⑦淡黄褐色粘質土層には、淡灰色粘土層のブロックが混じる。⑦層の上面は、東に向かって下降していることから、墳丘の裾の傾斜を表しているものと考えられる。⑦層の直下で、地山⑫淡灰茶色粘土層との間に、⑧、⑧'、⑧"暗黄灰色系の粘土層が、ほぼ水平に堆積している。墳丘の盛土で観察したように、この部分においても墳丘のベースを形成しているものと考えられる。⑬暗褐色粘質土層は谷の埋土である。



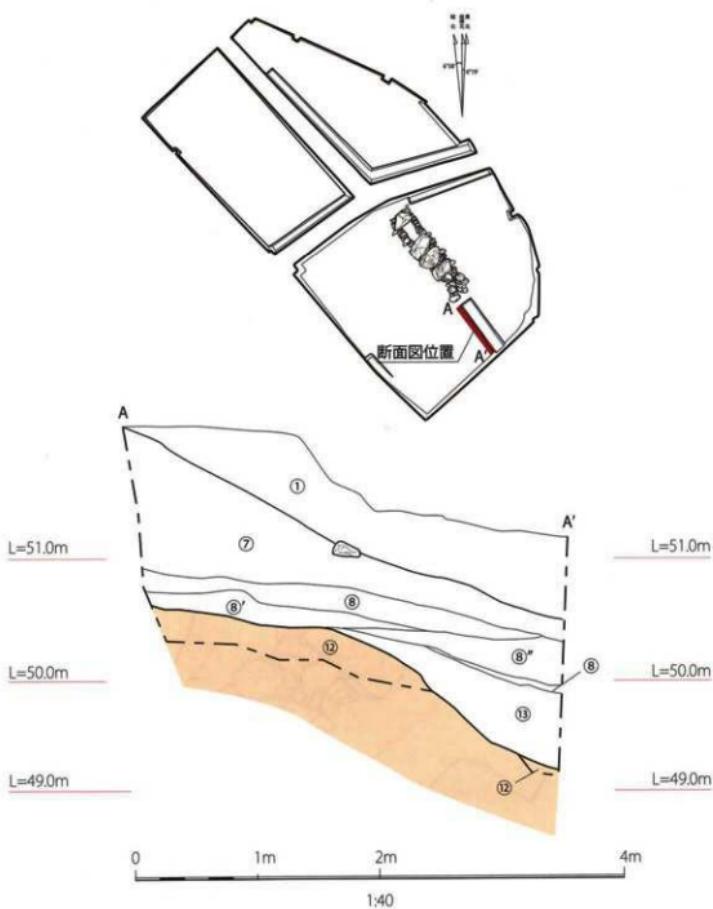
第3図 調査地全体図



第4図 調査地南壁土層断面図

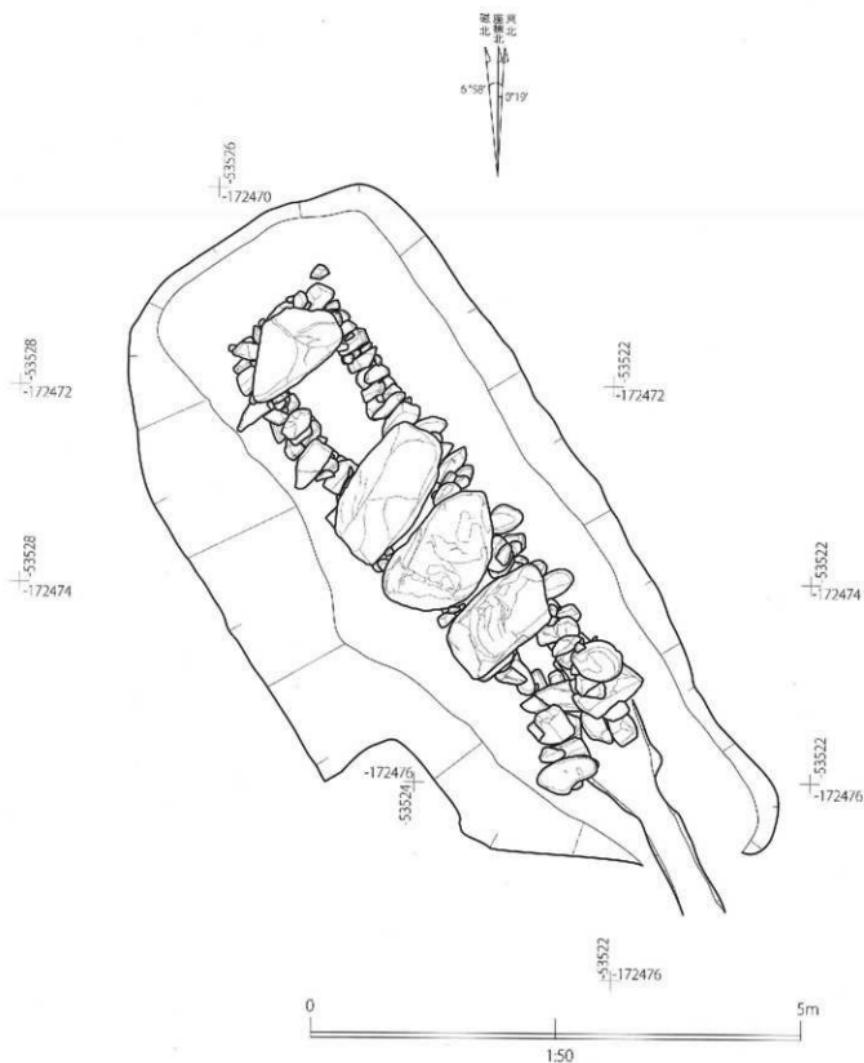


第5図 填丘土層断面図

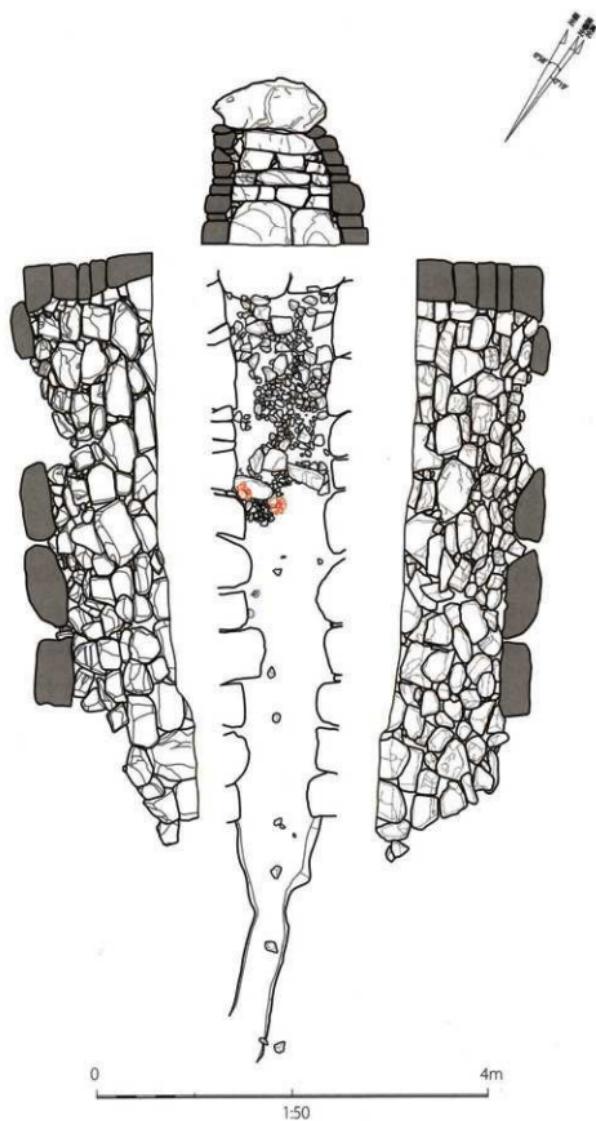


- ① 暗黄褐色粘性砂質土層(部分的に流水堆積層(細砂)が見られる)
- ⑦ 淡黄褐色粘土層(淡灰色粘土ブロック含む、填丘盛土)
- ⑧ 暗黄灰色粘土層(⑥⑩もほぼ同様でブロック状に堆積している、填丘盛土)
- ⑨ 暗橙黄灰色粘質土層(暗灰色粘土ブロック含む、石室掘方の埋土)
- ⑫ 淡灰色茶色粘土層(地山)
- ⑬ 暗褐色粘質土層(谷の埋土)

第6図 填丘裾部土層断面図



第7図 石室平面図



第8図 石室展開図

石室（第7～13図；図版8～25）

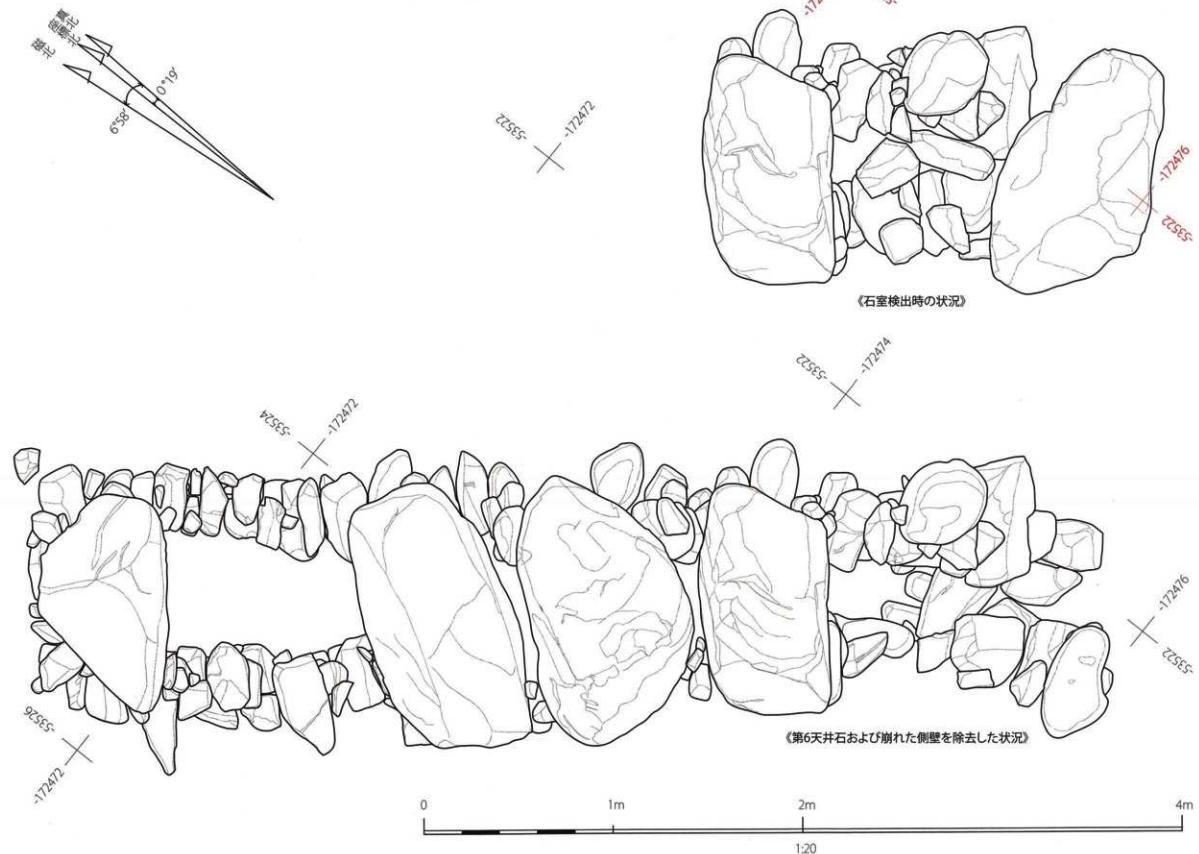
衣ヶ谷古墳の主体部は、横穴式石室である。衣ヶ谷古墳の横穴式石室の特徴として、無袖式であること、玄室と羨道の天井の高さに差がないことが、あげられる。したがって、横穴式石室の構造からは、玄室部分と羨道部分の区別が明瞭ではないと言える。しかし、奥壁から約2.5m付近まで、側壁（A面）の第一石（側壁の最下段の1石）で言えば、奥壁から5石目までの間の床面には、花崗岩の割り石（5～15cm程度）が敷き詰められている。また、棺台に使用したと思われる花崗岩の割り石も認められる。このことから、この部分を玄室と考えて良いと思われる。また、玄室の床面は、水平に作られているが、羨道部の床面は、人口に向かって緩やかに下降し、段も認められる。石室の全長は、約5.5mである。

検出時の石室内の状況は、玄室では、床面より約0.2mまで埋没していた。玄室内では、埋没していた上面より天井までの間の約1mは、空洞であったことから、土砂の流入は極めて少ないと言える。ところが羨道部においては、羨道中央付近より入口付近に至って、ほぼ全体に天井付近まで土砂が流れ込み、ほとんど埋没した状態であった。これらの石室内の埋没状況の違いは、後述するように、羨道部の側壁の崩壊によって、天井石と天井石の間に隙間が生じたことに起因するものと考えられる。埋土内からは、遺物は出土しなかった。

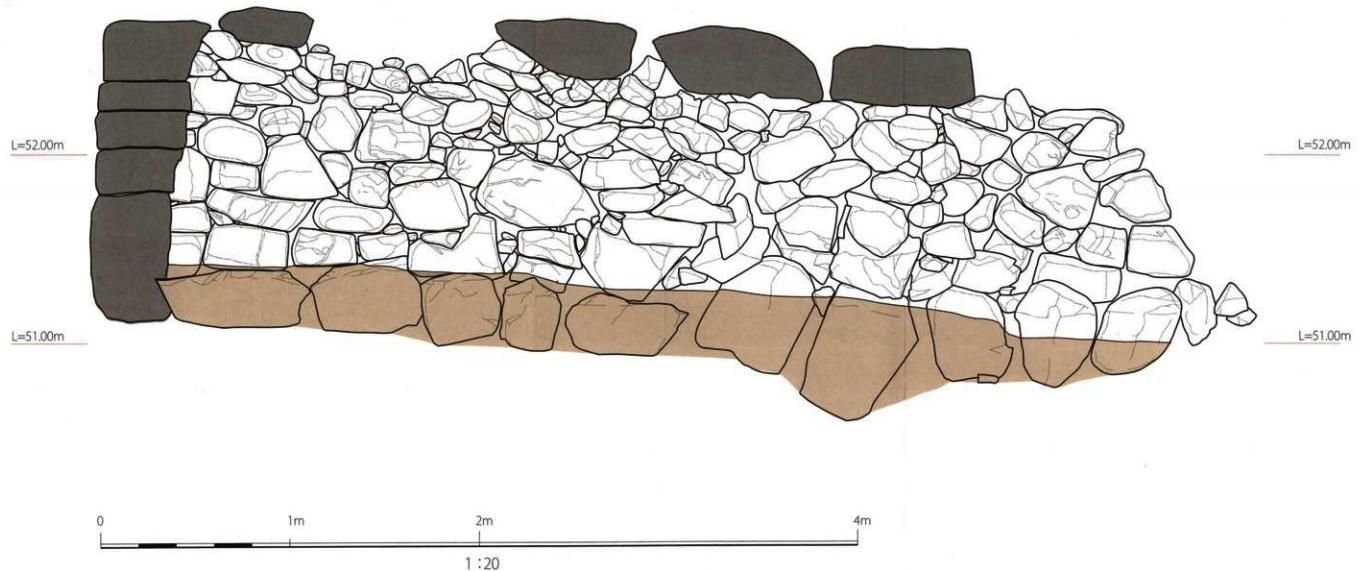
天井石は、玄室から羨道まで全てを合わせて、6石である。玄室が3石、羨道が3石である。奥壁から第2石は、道路工事中に除去されており、天井石の最後尾（入口付近）に位置する第6石は、第9図に示すとおり、現位置より石室の外側に外れた位置で検出された。元来、第6石が位置した部分は、側壁の上部も崩れており、盗掘穴と考えられる。天井石は全て花崗岩で、概ね長軸が1.4m前後、短軸が0.8m前後の長方形に近いものと、三角形に近いものとがある。

石室内部の状況は、床面の幅は玄室では約1m程度である。羨道では、入口付近で約0.7mと、徐々に狭くなる傾向にある。床面の高さは、玄室ではほぼフラットで側壁の第1石の上端が床面の高さである。奥壁部分での床面の高さは、標高約51.4mを測る。羨道は入口に向かって徐々に下降するので、第1石が露出することになる。入口付近の床面の高さは、標高50.95mである。玄室より人口に向かって、45cm下がっていることになる。

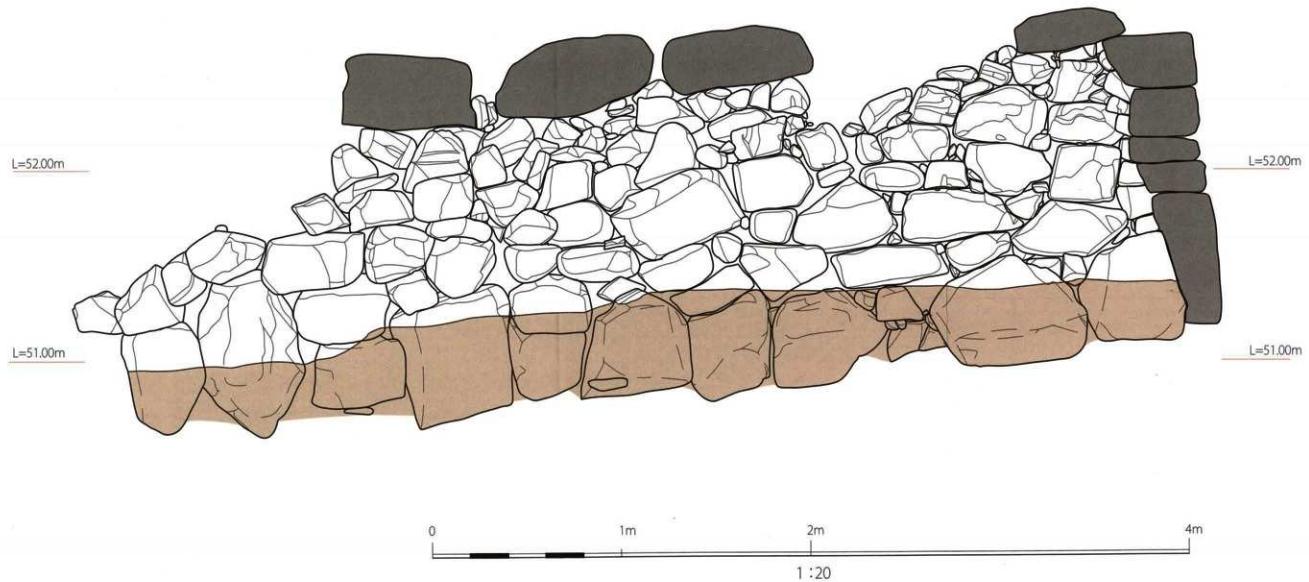
石室の高さは、奥壁付近では床から天井までが1.2m、天井石の第5石のあたりでは1.05mである。玄室の高さも羨道内の高さも、さほど変わらない。側壁の様相は、奥壁に向かって右側の側壁（A面）では、第1石（最下段）は、花崗岩の比較的大きな石を使っている。側壁の基礎をなすものと考えられる。第1石より上部（下より2～5段目）の床から約0.8mまでに積まれた石は、花崗岩のみを用いている。第1石ほどは、大きくないものの、高さ0.2m以上の断面四角形をなす石を小口積みにしている。さらに上部では、石は小さくなり、砂岩（河原石）も混じるようになる。B面（奥壁に向かって左側の側壁）もほぼ同様である。玄室については、工事中に天井石の第2石が、重機で取り除かれた時点で、多少側壁の上部を痛めているものの、ほとんど築造時の形態を留めていると思われる。ただし、羨道については、図版11～14に見られ



第9図 石室平面図(天井石)



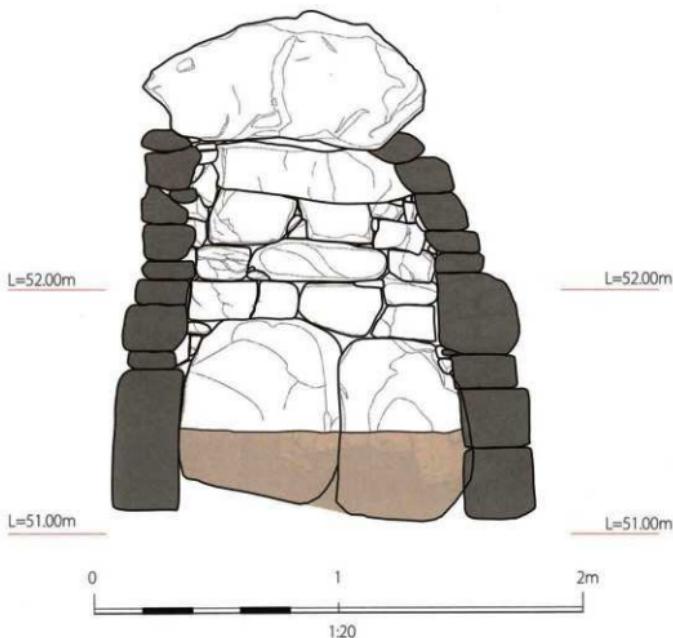
第10図 石室A立面図



第11図 石室B面立面図

るよう側壁 A 面、側壁 B 面ともに、大きく内側に迫り出している様子がうかがえる。もっとも狭いところでは、側壁 A 面、側壁 B 面の距離が、0.3 m 程度にまで迫っている。石室の入口から、羨道を通って、玄室には入ることができない状態である。また、羨道部の床面には、側壁に積まれていた石と思われるものが、多数散乱していた。このことから、羨道部の天井石は、横方向だけでなく、縦方向にも多少動いている可能性がある。この石室の崩れが、何に起因しているのかは不明だが、盗掘穴が石室の入口付近に見られることから考えると、盗掘時には羨道から玄室に入ったと思われ。羨道部の側壁は、盗掘以降に崩れたと言えよう。また、閉塞石らしきものの存在は、認められなかった。

奥壁（C 面）は、最下段の第 1 石には、第 12 図に示すように、高さ約 0.7 m、幅 0.65 m（左）、高さ約 0.7 m、幅 0.55 m（右）を測る、重量感のある大型の花崗岩を二石立てている。そして、その上部に 4 段の石を積み重ねている。下から 2 段目より上方の石は、高さをほぼ揃えて、整然と積んでいる。側壁の石の積み方とは、様相を異にする。非常に残存状態も良く、ほぼ築造当初の状態を残していると考えられる。構造的には、5 段で積み上げていることから、極めてシンプルな積み方と言える。下から 1 段目が 2 石、2 段目から 4 段目は 3 石、最上段は横長の石を 1 石



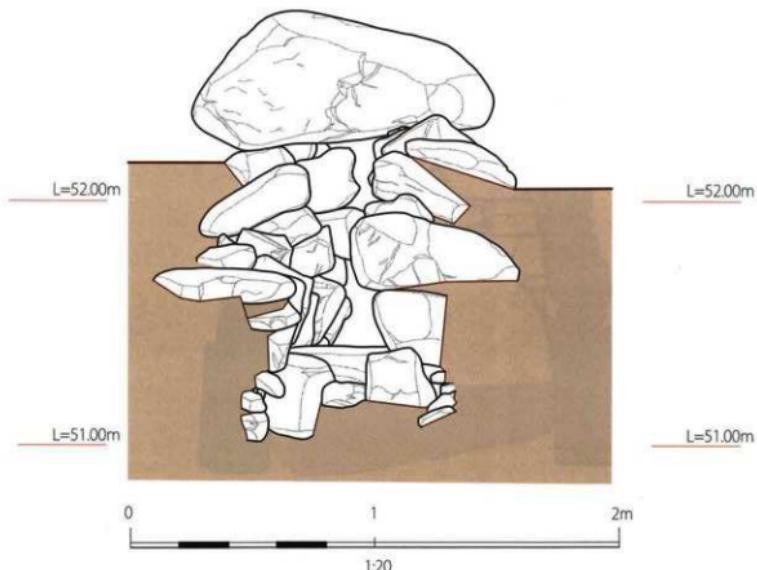
第12図 石室C面立面図

で積んでいる。各段の石と石の継ぎ目が、上段の継ぎ目、下段の継ぎ目と合わないように意識しているようである。側壁（A面、B面）および奥壁（C面）については、それぞれ内傾し、壁面の持ち送りは著しいと言える。

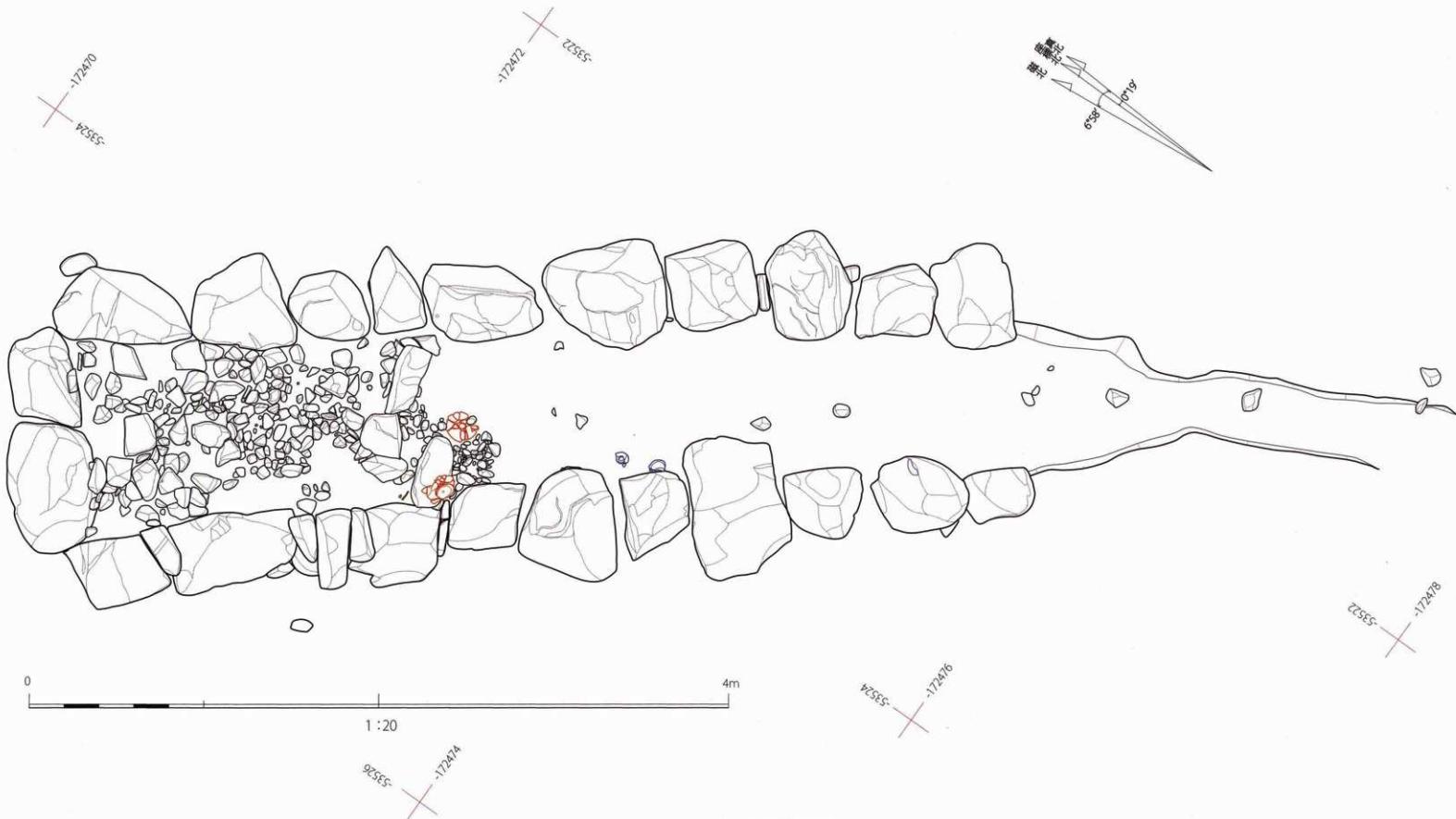
床面の状況は、先にも述べたように、玄室内では花崗岩の割石（5～15cm程度）を敷いている（第14図）。盗掘時に乱された部分もあると思われるが、さほど丁寧に敷き詰めたとは言えない状況である。また、棺台に使用されたと思われる幅20cm、長さ25～40cm程度の扁平な花崗岩の割り石が、奥壁から約20cm離れた地点に3～4枚、さらに奥壁から約2m離れた地点に3枚、その間にも数枚見られる。棺台の位置から木棺の長さを類推すると、2m以内と考えられる。また、木棺の幅は、棺を石室の入口から搬入したとすれば、石室の入口の幅は、0.7m程度であるから、この大きさを超えることはないと考えられる。

石室内の出土品については、まず玄室内においては、木棺に使用されたと考えられる鉄製の釘が、7本出土した。いずれも棺台と考えている割り石の近くから出土している。

金銅製の耳飾が1点、奥壁に近い棺台の中央の石から、約20cm離れた地点より出土した。仮に、この耳飾が埋葬された時点で、身体に装着していたもので、検出地点がほぼ現位置を保っているとすれば、耳飾の検出地点が頭の位置ということになる。奥壁の方向に頭を向けて埋葬されてい



第13図 石室入口付近立面図



第14圖 石室床平面圖

たことになる。

奥壁から離れた棺台の上部に、土師器の坏身が、口縁部を下にした状態で検出された。また、棺台の近くの床面より、土師器の坏蓋を検出した。おそらく、棺の上部に供獻されていたものが、転落したものであろう。

その他、須恵器の長頸壺が 1 点、坏身が 4 点、坏蓋が 5 点出土している。須恵器は、全て羨道内でまとまりなく、いずれも床面の直上で、散乱したような状況で出土している。盜掘時に、玄室より、かき出された可能性がある。

墓道は、石室の入口付近から石室の外側に向かって、約 2 m 確認した。墓道の幅は、35 ~ 40cm で、深さは 5 cm 程度である。浅い溝状を呈している。

排水溝（第 15、16 図；図版 26 ~ 28）

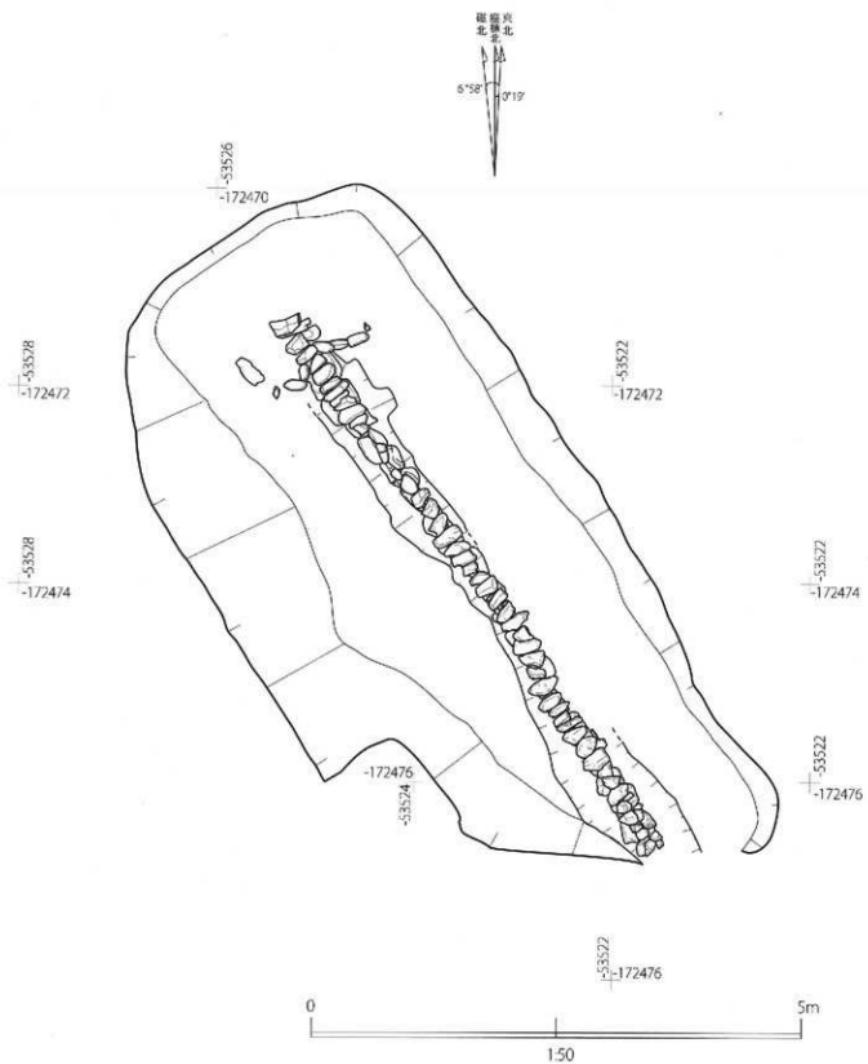
石室の玄室、羨道の石材および床を除去すると、排水溝を検出した。第 14 図に示すように、排水溝は石室の掘方（墓坑）のほぼ中央に、直線状に構築されている。

排水溝の全長は、約 6.7 m である。第 16 図に示すように、排水溝の構造は長さ 20 ~ 40cm、幅 10 ~ 15cm の砂岩（河原石）を側石として縦長に二列に並べ、その上に同じような大きさの石を横方向に、蓋石として並べている。構造的には、二列に並べた側石列の内側が溝になり、石室、および墓穴に溜まった雨水および地下水を、墳丘の東側の谷に、排水する施設と考えられる。排水溝は、西端から約 3.5 m は、ほぼ水平を保ち、その地点から東に向かって緩やかに下降する。排水溝の西端付近の蓋石の上面の高さは、標高 51.0 m 前後、東端の蓋石の上面の高さは、標高 50.7 m である。約 30cm の勾配が東に向かって付いていることになる。玄室の床面の高さは、標高 51.4 m 前後、石室の入口付近の床面の高さは、標高 51 m 程度であるから、排水溝は石室の床下 30 ~ 40cm 下方に埋まっている暗渠ということになる。

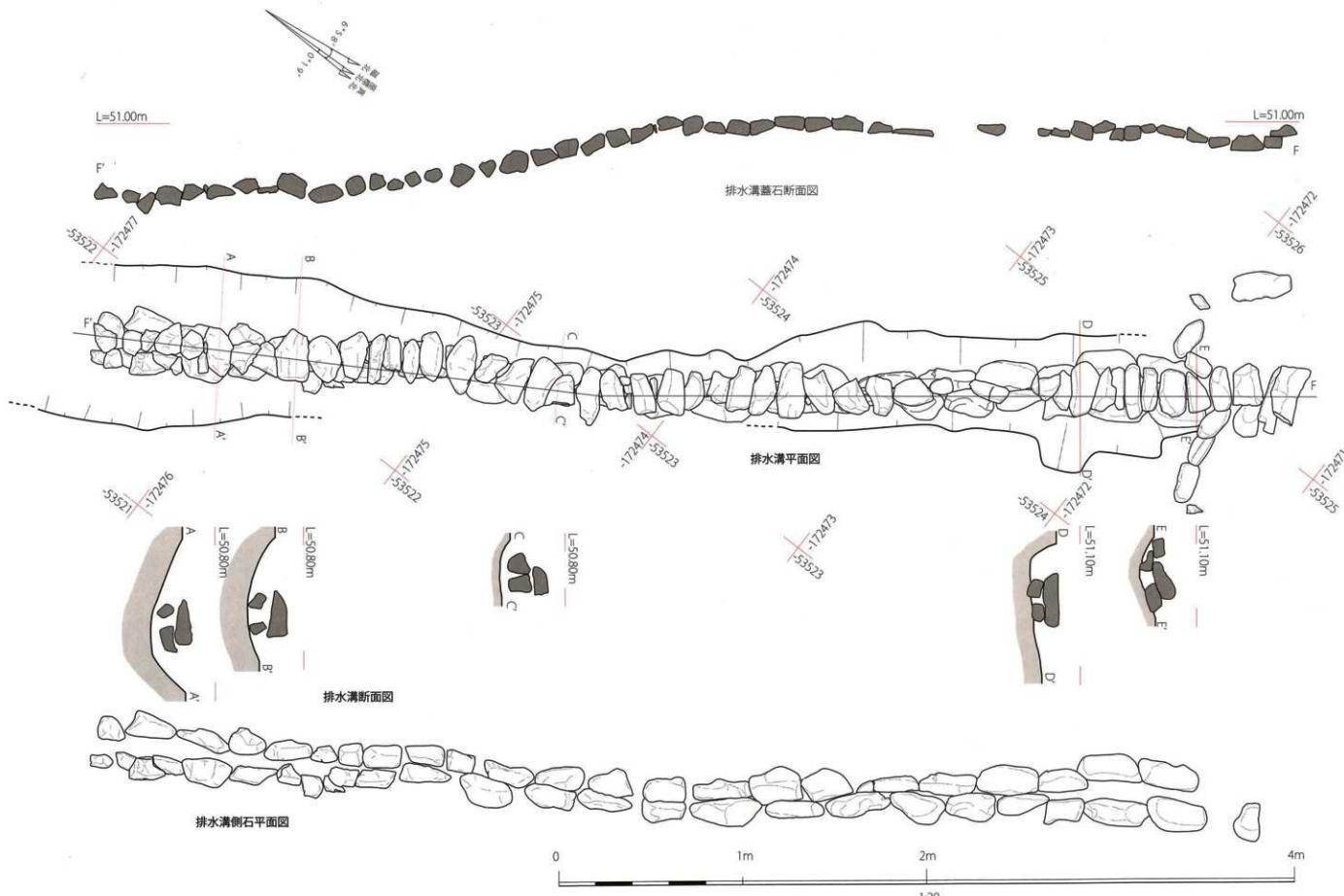
さらに詳しく排水溝の構造について述べることにする。第 16 図の排水溝平面図と排水溝側石平面図を照らし合わせると、排水溝の西端から約 50cm (E 断面より西側) は、蓋石は見られるが側石が存在しないことがわかる。また、側石の始まるあたり (E 断面付近) には、排水溝から南北にのびる石列が見られる。この南北にのびる石列の下部にも、側石は見られない。石室の平面図を重ね合わせると、この付近の上部に奥壁が位置することがわかる。これらの石材は、排水施設とは直接関連しないが、奥壁の重みに耐えるための基礎石としての役割を、はたしていると考えられる。また、排水溝の高さが、水平に保たれている部分の上部は玄室である。排水溝が傾斜する部分の上部は、羨道および墓道部分にあたる。すなわち、玄室の床面が水平で、羨道の床が傾斜しているのは、排水溝の設置時、あるいは墓穴の掘削時にすでに計画的に施工されていたことがわかる。

3. 出土遺物（第 17、18 図；図版 31 ~ 33）

今回の調査で出土した遺物は、須恵器の坏蓋（1 ~ 5）5 点、坏身（6 ~ 9）4 点、台付長頸壺（14）1 点、高坏（10 ~ 13）4 点、十師器の坏蓋（15）1 点、坏身（16）1 点、鉄製釘 7 点



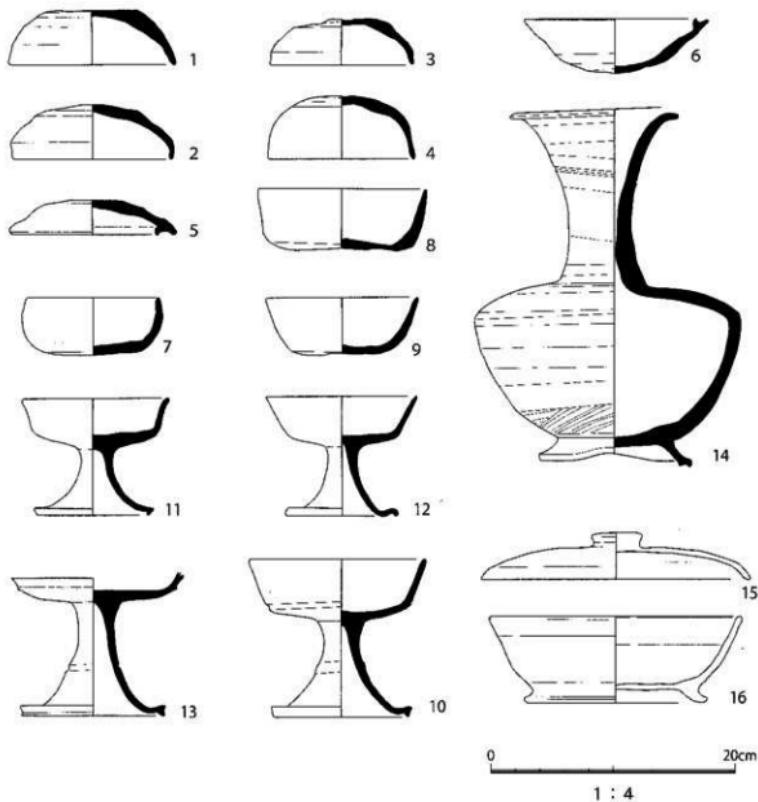
第15図 排水溝平面図



第16図 排水溝詳細図

(17～23) 7点、金銅製耳飾 (24) 1点である。

須恵器の坏蓋 (1) は、今回の調査で出土した蓋の中では、もっとも口径の大きいものである。器壁は全体的に厚く、粗雑な作りである。口縁部は、大きく歪んでいる。完形品である。坏蓋(2)、(3) は、口径には差があるものの、共に口縁部をほぼ垂直に立て、比較的丁寧に仕上げている。形式的に若干古い要素を残していると思われる。(3) は完形品である。坏蓋 (4) は、非常に器高が高く、口縁端部の作りもシンプルである。一見、坏身のように見えるが、坏身としては安定感に欠けることから蓋として報告する。完形品である。坏蓋 (5) は、内側に「かえり」が見られる。器高は低く、丁寧な作りである。形式的には新しい要素をもつ。完形品である。須恵器の坏身 (6) は、口縁部の内側に受け部をもつ、古い形式の要素を残している。焼成は非常に悪く、乳白色を呈している。坏身 (7) は、やや内湾気味の口縁部をもつ。器壁は全体的に厚い。口縁



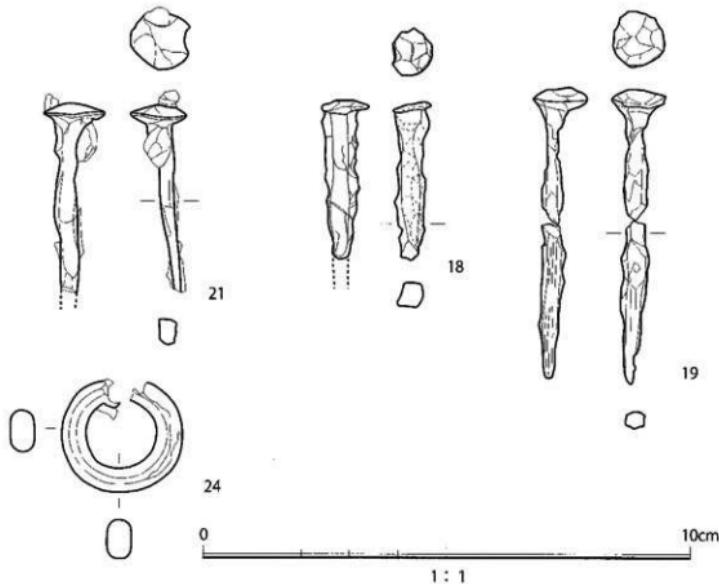
第17図 出土遺物図1

部は歪んでいる。完形品である。坏身（8）は、底部から外上方に直線的に立ち上がる口縁部をもつ。端部は尖り気味である。坏身（9）は、（8）とは対照的に、外形は丸みをもつ。完形品である。須恵器の高坏（11）、（12）は、やや小ぶりのタイプである。（12）は口縁部、脚部に若干の歪が見られる。高坏（13）は、坏部の上方はほとんど欠損しているが、坏部の外面下半に明瞭な段が見られる。脚部の高さ、底径はもっとも大きい。高坏（10）は中間的な大きさといえる。坏部の下半に明瞭な沈線がめぐる。高坏は全て、丁寧な作りである。須恵器の台坏長颈壺（14）は、口縁部は大きく開き、頸部の中間よりやや上方に沈線が一条めぐる。体部は丸みを持つ。台部は、歪んでいるために安定感に欠ける。完形品である。

土師器の坏蓋（15）は、扁平なつまみをもつ。内外面共に、摩滅が激しく、調整は不明である。坏身（16）は、（15）と同様に摩滅が激しい。外面の口縁部の若干下方に、回転ナデの調整が残る。外側に開く、高台が付く。（15）、（16）は色調、胎土、焼成が非常に似ている。

鉄製釘は、いずれも錆が著しく、本来の姿を観察するのは難しい。（19）は先端近くまで残っていると思われる。長さ約6cmである。

金銅製の耳飾（24）は、断面が楕円形をしている。一部、金箔が剥がれ、銅の部分がのぞいている。



第18図 出土遺物図2

IV. まとめ

以下、今回の衣ヶ谷古墳の発掘調査成果について、整理しておくことにする。

衣ヶ谷古墳は、概ね南北方向の丘陵の東側斜面に築かれており、その築造順序について考えてみると、まず丘陵側は斜面をカットして、谷側は谷地形を埋めて平坦面を形成する。東西方向では約12～13m、南北方向は調査区外におよぶ部分もあるので正確にはわからないが、現地形から想像すると、似たような距離であろう。造成した平坦面に、墳丘の基礎部分をなす⑧層を積み上げ、その上部に⑦層を積み、墳丘盛土は古墳の西端では、地山面より50～60cm高くなっている。墓坑は、この時点で掘削している。したがって、墓坑は、墳丘の一部を積み上げてから掘削している。次に、墓坑の底部に排水溝を設置し、完全に埋没させる。石室は、排水溝が暗渠化した上部に構築する。まず第1石を並べ、第1石の外側を埋め、内側にも床を構築して、安定させてから上部の石を積み上げたと考えられる。石室の構築後は、墓坑を地山面の近くまで⑨～⑩層によって埋め戻し、その上面に⑧層を積むことで墳丘の基礎としている。⑧層の上部は、⑦、⑥層によって、墳丘を形成するという順序になると考えられる。

次に、古墳の埋没状況について考えてみることにする。衣ヶ谷古墳は、工事中に発見された新規発見の古墳である。『岸和田市史』第1巻で紹介されているように、衣ヶ谷古墳周辺の丘陵内では、赤山古墳群をはじめ、古くから複数の古墳の存在が明らかにされている。にもかかわらず、衣ヶ谷古墳が、今まで発見されなかった要因の1つに、古墳が完全に埋没していたことがあげられる。第4～6図に見られるように、古墳築造後の表土層の上部に、明るい赤色系の粘質土層が1m以上堆積おり、古墳を完全に埋没させているのがわかる。ところが、古墳築造後の表土層の下部には、これらの上砂の堆積が全く認められない。古墳築造のために、地形を大きく改変したこともあるが、谷地形の埋没土内にも認められない。これは衣ヶ谷古墳周辺の丘陵内において、古墳築造後に大規模な土砂の流出を示している。おそらく、衣ヶ谷古墳が築造された頃、赤山丘陵において、樹木の伐採をともなう、大規模な地形の改変があり、丘陵上の土砂の流出を招く要因となったと考えられる。さらに、想像をたくましくするならば、赤山丘陵一帯を、6世紀後半から7世紀の初頭にかけての墓域として、開発したとは考えられないだろうか。いずれにせよ、赤山丘陵には衣ヶ谷古墳築造以降に、大規模な土砂の流出があったと考えられることから、赤山古墳群や衣ヶ谷古墳のほかにも複数の古墳が、現在も埋没している可能性は十分考えられる。

衣ヶ谷古墳は、泉州地域では極めて類例の少ない、7世紀初頭の方墳である。主体部の横穴式石室は、人半を花崗岩によって積み上げている。石材に使用された花崗岩は、多少、面を揃えるなどの加工は施しているものの、この時期に他地域で見られるような凝灰岩の切石のような精巧なものでは無く、古い時期の横穴式石室の要素を残していると考えられる。ただし、幅1m程度の狹小な横穴式石室や墳形が方墳であることは、新しい要素と言える。古い要素と新しい要素が、合わさっていることが、衣ヶ谷古墳の特徴と言えよう。

あとがき（第1図；図版33）

衣ヶ谷古墳の石室の一部は、大阪府営蜻蛉池公園内に、移築、復原されて、府営公園のモニュメントの一つとして、公開されています。

道路工事中に発見されたこともあって、古墳を現地に保存することはできませんでしたが、発見地点から約1.8km南東に位置する、府民の憩いの場である府営公園内にその姿を見る事ができます。

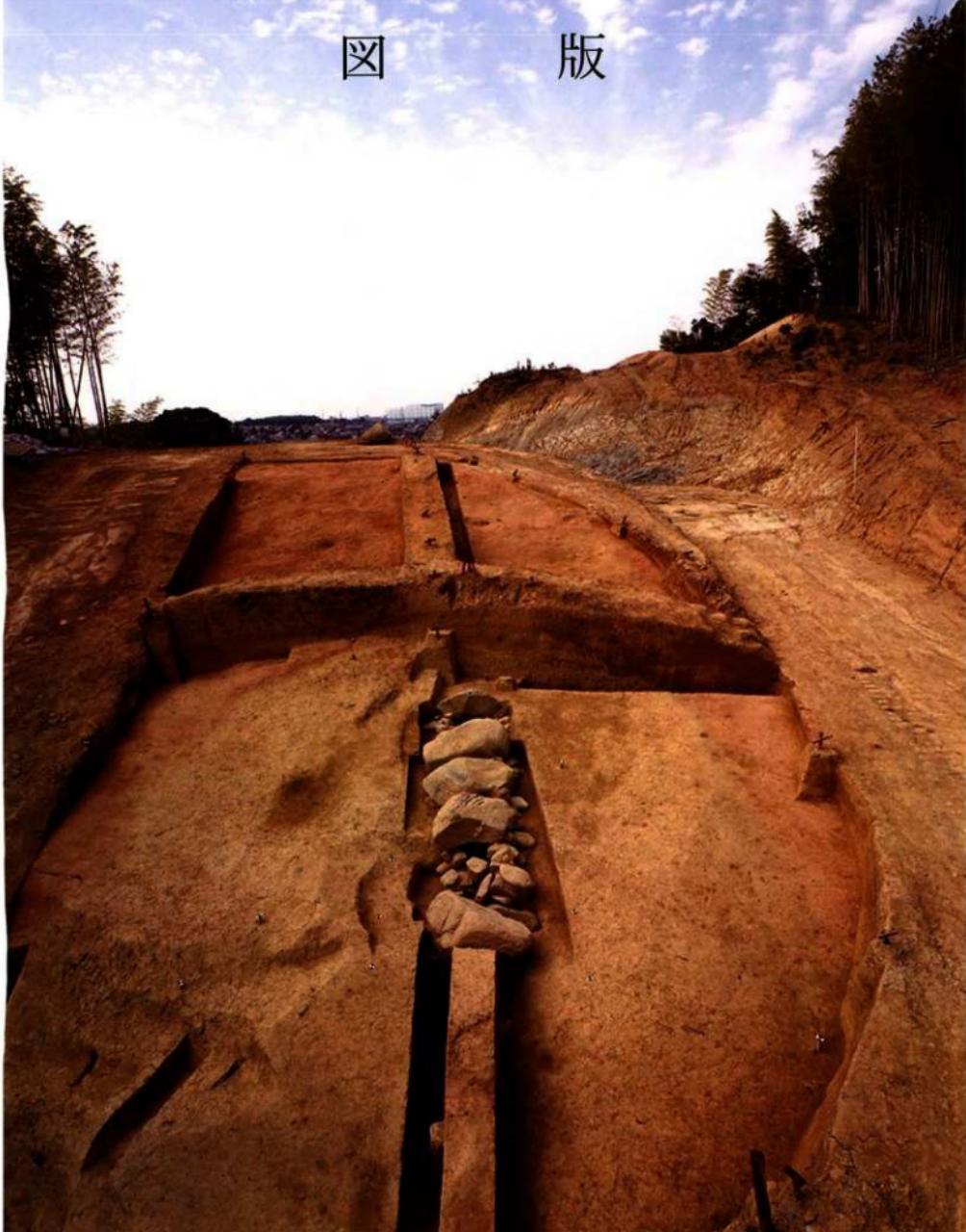
千数百年の長い間、土砂に埋もれていた古墳が、文化財として、公園のモニュメントとして活用されることの大変有意義なことと考えます。

発掘調査、古墳の移築、復元に、ご協力をいただいた大阪府都市整備部岸和田土木事務所の皆様に大変感謝します。

報告書抄録

ふりがな	ころもがたにこふん						
書名	衣ヶ谷古墳－一般府道春木岸和田線道路整備工事に伴う発掘調査－						
副書名							
巻次数							
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	2009-9						
編集著者名							
編集機関	大阪府教育委員会						
所在地	(〒)540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351(代表)						
発行年月日	2010年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード					
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積
衣ヶ谷古墳	大阪府岸和田市 三ヶ山町	27226	55	34° 26' 37"	135° 25' 2°	2008年9月1日～ 2008年11月5日	250m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
衣ヶ谷古墳	古墳	古墳時代	埋葬施設	須恵器、土師器 耳飾	横穴式石室を有する 7世紀初頭の方墳		
要約	横穴式石室を有する、7世紀初頭の方墳の調査。 方墳は一辺約10m。 出土品は、盗掘を受けているため少ないが、須恵器、土師器、金環、釘が出土。						

図 版





西から

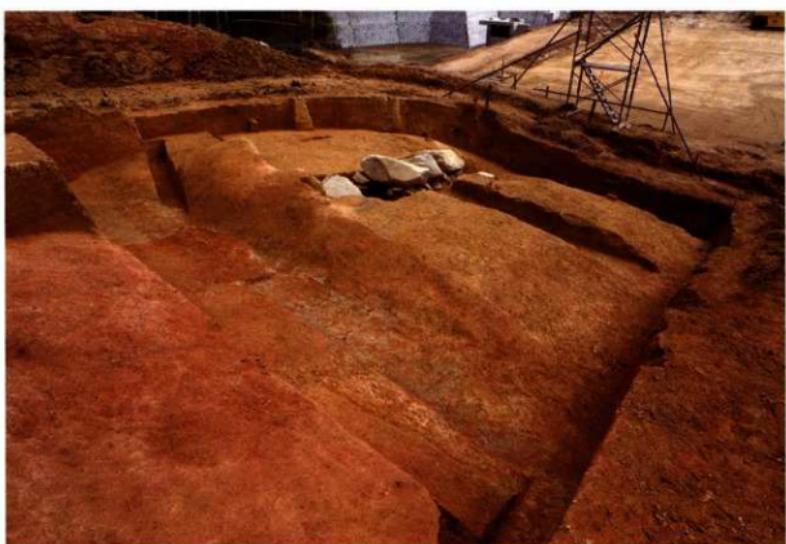


東から

図版2 調査区全景（垂直）



図版3 古墳全景



南西から



東から

図版4 トレンチ南壁断面



北から

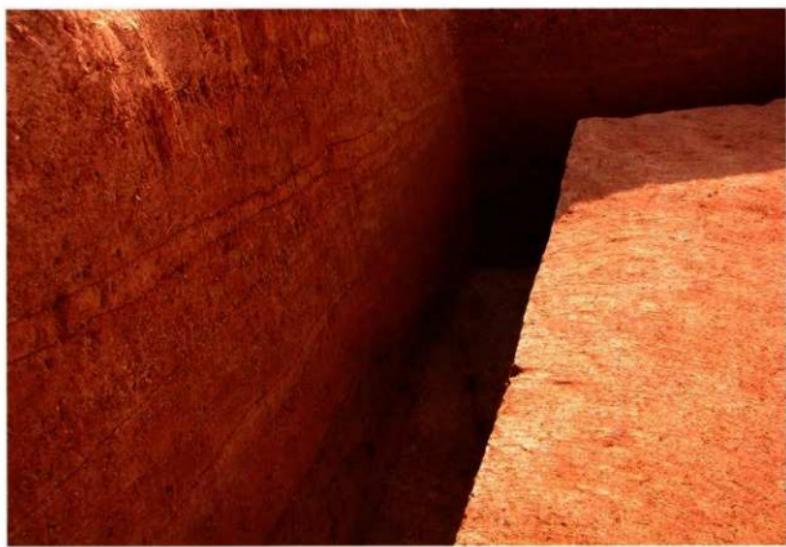


北西から

図版5 トレンチ南北セクション西壁



西から



北西から

図版6 トレンチ南北セクション東壁



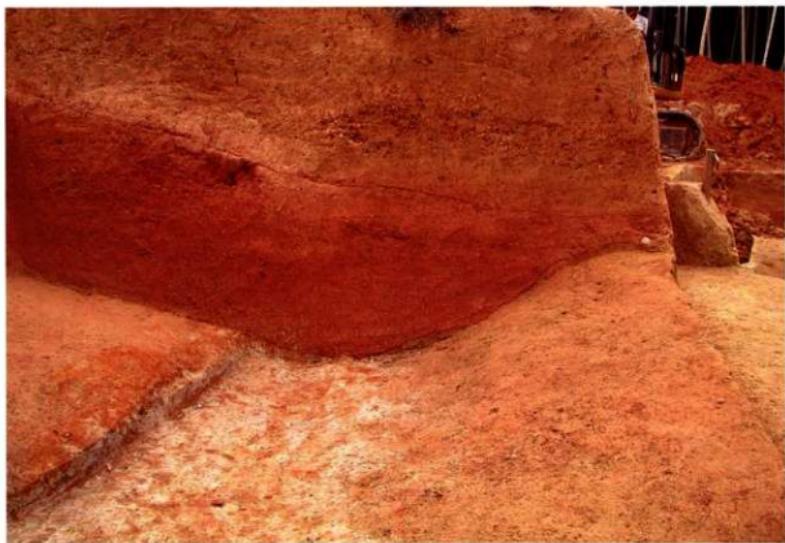
北半部東から



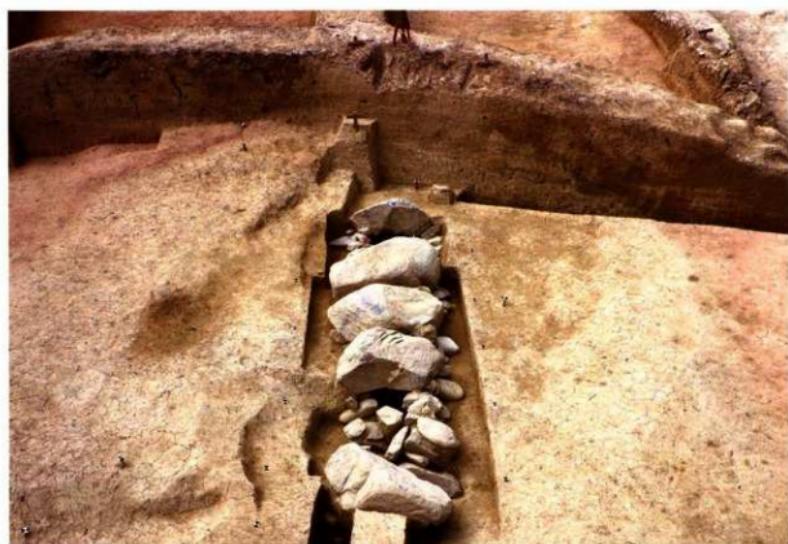
南半部東から



北から



南から



東から



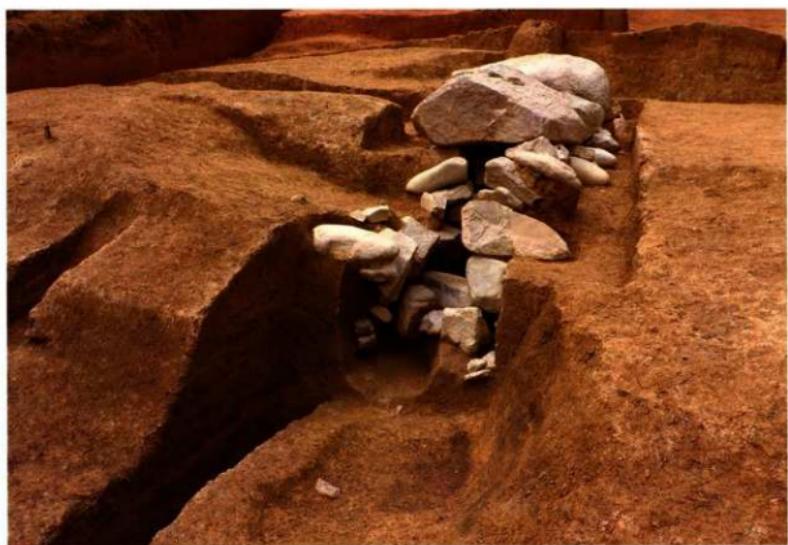
西から



北西から

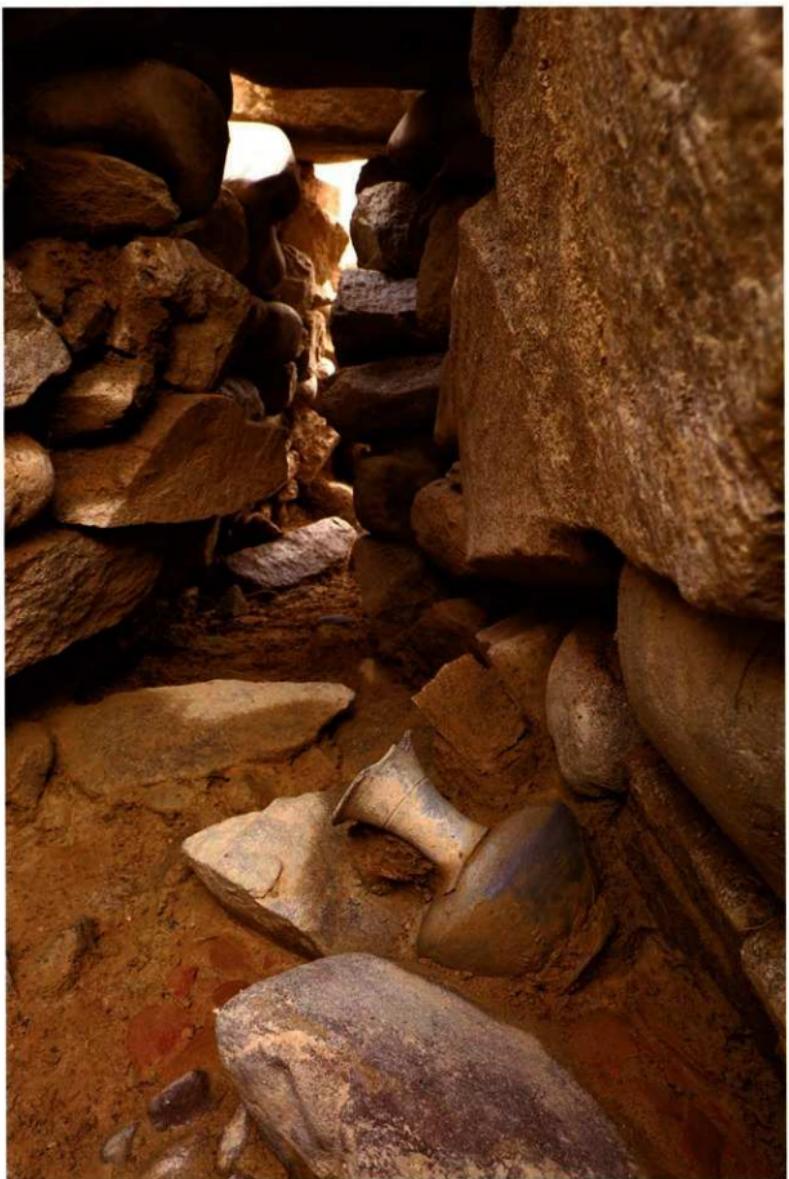


北東から





入口付近から奥壁を見る





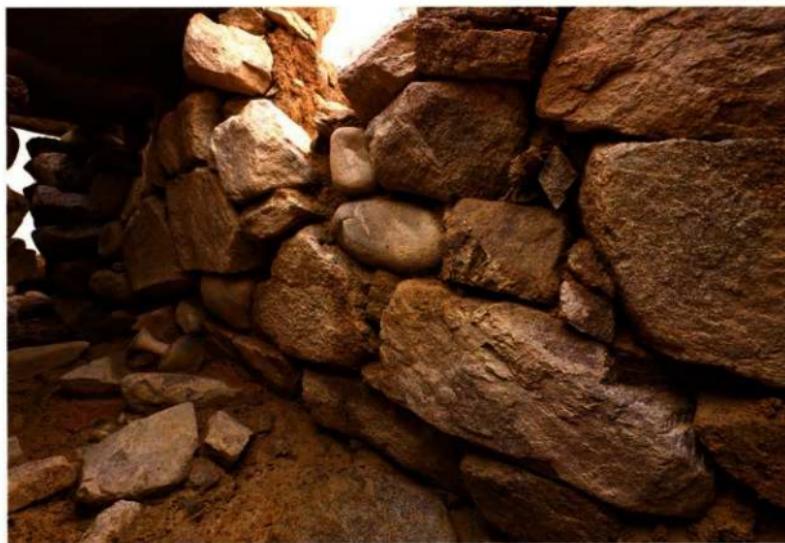
玄室から入口を見る



羨道床



側壁 A面

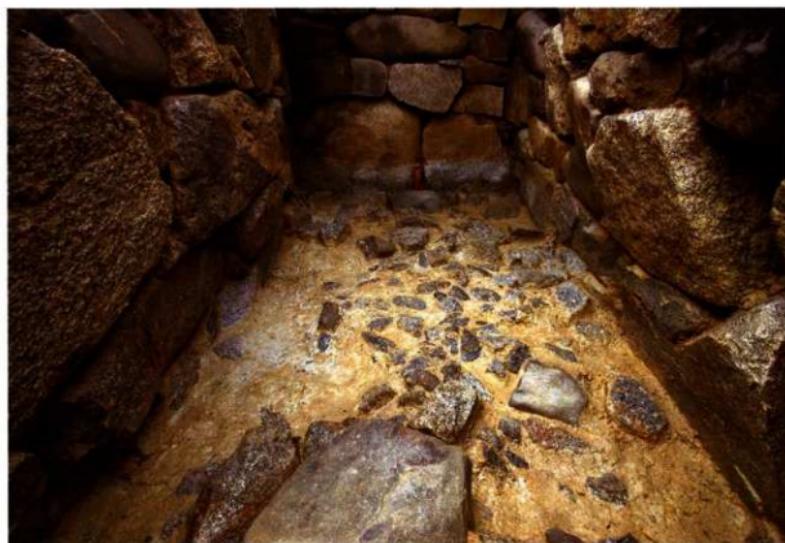


側壁 B面

図版 15 石室 8（玄室）



奥壁

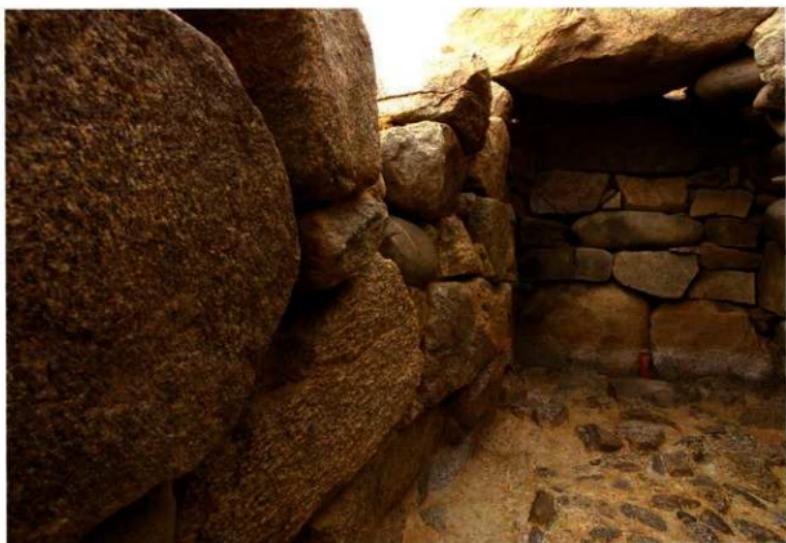


玄室床

図版 16 石室 9 (玄室側壁)



玄室側壁 A 面



玄室側壁 B 面



東から



入口付近から奥壁を見る

図版 18 石室 11（羨道下部）

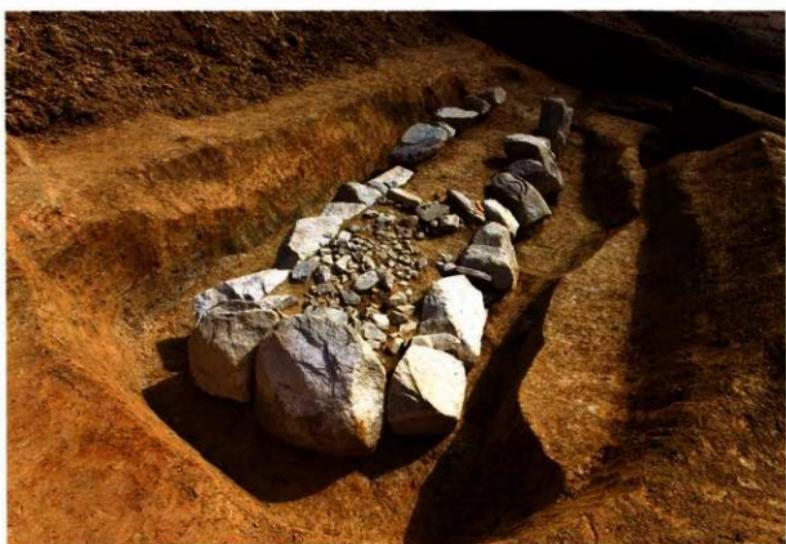


南東から



東から

図版 19 石室 12（第一石）



南西から



南から

図版 20 石室 13（第一石）



西から



南東から

図版 21 石室 14（玄室第一石）



南から



北西から



東から

図版 23 石室床 2



東から



北東から

圖版 24 遺物出土狀況 1（須惠器・土師器）



玄室



羨道

図版 25 遺物出土状況 2 (釘・金環)



玄室



玄室

図版 26 排水溝 1 (上部)



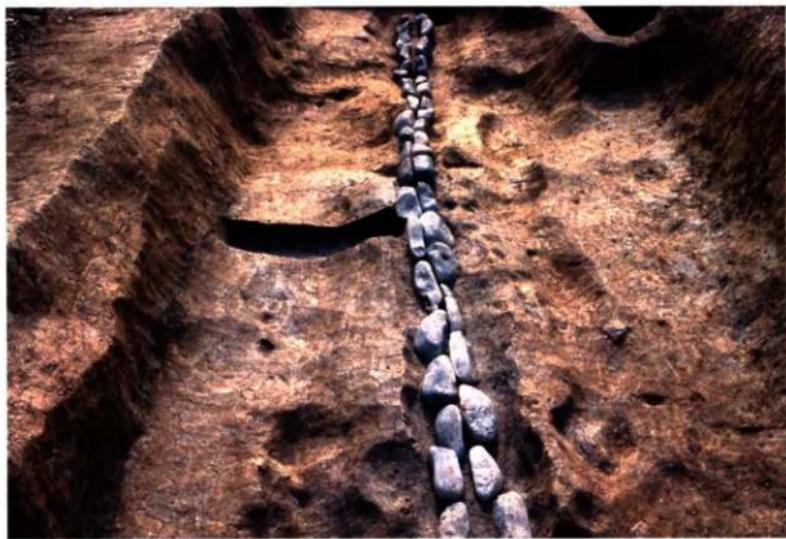
西から



北東から

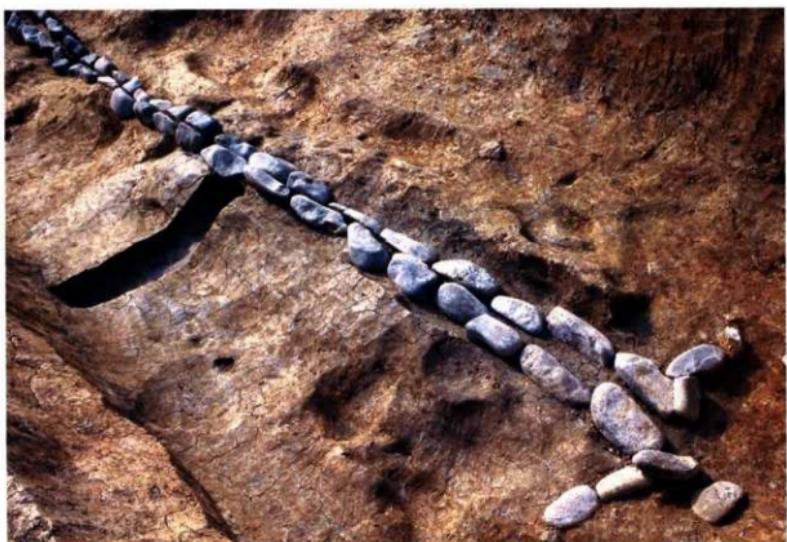


西から



東から

図版 28 排水溝 3（下部）



北西から



北から



西から



東から

図版 30 石室の移築状況



玄室部



大阪府営鷺池公園内



1



6



2



7



3



4



8



5



9

圖版 32 出土遺物 2 須惠器



10



13



11



12



14



土師器蓋：15、坏：16、金環：24



釘（左から）：18、21、17、19、20、22、23

大阪府埋蔵文化財調査報告 2009－9

衣ヶ谷古墳

—一般府道春木岸和田線道路整備工事に伴う発掘調査—

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目
TEL 06-6941-0351（代表）

発行日 平成22年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号

